

---

# 不老不死の活用方法？

Flugel

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不老不死の活用方法？

### 【Nコード】

N5899N

### 【作者名】

Flugel

### 【あらすじ】

神様の暇つぶしに巻き込まれ、チート能力を与えられ転生した者達。

その中で、不老不死の身体を得て、マイペースに生き延びようとする少女？の物語。

注）しばらくは原作のげの字も出てきません。また、主人公は若干変態の気があります。ご了承ください。

この作品は、SS 搜索・投稿掲示板 Arcadia にも投稿して  
います。

2011・08・13 五話までの内容を改訂しました。

## オリジナル登場人物設定

### オリジナル登場人物設定

本SSにおける独自設定、登場人物の解説です

『完全なる世界』：主人公達の勢力。有能な者が多いが、それと比例するように変態成分も多め

### ・ソウ

本SSの主人公で転生者

外見は蒼髪蒼眼の小柄な美少女。髪型は腰ぐらいまでのロングで、ポニーテールみたいになっている

胸は大き過ぎず小さ過ぎずのサイズ。フタナリ。若干変態。

この世界への出現時期が、地球誕生の頃、だったため、地球最古の存在。生き字引？

邪神とは喧嘩友達、かもしれない

いつの間にか奉仕種族まで発生させてしまつて、着々と人外への道を歩みつつある。

また、世界各地に賢者伝説を残してしまい、民間伝承ではあるが信仰されてもいる。

チートスキルは

心身の完全制御：身体機能を完全に制御できる。感情面も一定の操作が可能。

魔眼：解析・再現能力を持つ。発動時は紅眼に。非戦闘系技能にも応用可能。

魅力（弱）：理性の薄い動物等に懐かれやすく、植物の栽培や採集にプラス補正。

式神×2：陰陽一对の式神を使役できる。学習して能力を成長させ

ていくことができる。

普段着はゆったりとした和服を好んでいる（若干動き易くなるように改良してある）

戦闘時は基本的に右側にイン、左側にヨウを纏って、左右で相反する力を用いて戦う

#### ・イン&ヨウ

ソウに使役される陰陽一對の式神（識神）

世界の事象を識ることによって成長し、それらを自らの力として取り込み、能力を強化していく

インは陰に属する能力（減衰・吸収・侵蝕など）を、ヨウは陽に属する能力（増幅・放出・破断など）を操る

成長次第では、その他にも光と影に繋がるイメージのある能力を、それぞれ扱える（光で退魔、闇で呪縛などなど）

普段は髪を伸ばした童女の姿をとる。その他にも、狼や鷹などの姿をとることも可能

外見は、インは黒髪（黒毛）蒼眼に暗色系の和服姿で、ヨウは白髪（白毛）紅眼に暖色系の和服姿

色が違うことを覗けば、見分けがつかない、双子みたいな存在

性格は、インが物静かなインドア系、ヨウは快活な行動派

戦闘時は変化能力を駆使してソウの武具として、または独立戦力として戦う

#### 《竜種》

ソウ達が乗騎として育てていた竜たちの末裔にして、ソウに全力で仕える奉仕種族

個体ごとに吐くブレスの種類が異なり、炎や氷、雷等の他に、毒や石化なども存在する

進化の過程で魔力を取り込んでおり、魔術を使うことも出来る  
外見は物語に出てくる翼ある竜のようだが、リンドブルム

体型は個々で異なり、極端な例では東洋の竜の様に首や胴、尾がすらりと長い者なども居る

頭部、手足の先などは頑丈な鱗に覆われているが、  
首や胸元など鬣、羽毛が生えている所もあるため、抱きつくと結構ふかふかしてて気持ち良い

コミュニケーション手段は、鳴き声と魔術による念話  
後に、魔術を用いて人型を取れるようになり、普通の会話も可能になった

寿命は千数百歳くらい。稀に数千年生きる個体が現れ、長老、翁等と呼ばれている

ちなみに、主人公達の影響で日本人っぽい名前の者が多く、暮らし方も純和風

『完全なる世界』結成後は『裏界』の管理を任されている

#### ・千歳ちとせ（雷竜）

160歳（人間換算10歳）くらいからソウ達に連れまわされていた竜種の少女

数百年かけて扱かれた結果、長老衆に次ぐ実力者に

涙目の表情が襲いたくなるほど可愛いらしく、良く弄られている

『完全なる世界』結成後は、マイペースな主人公の秘書役を頑張つてこなしている

#### ・遥樹はるか（木竜）

3世紀の頃で二千百歳くらいの竜種の長老

結構お茶目な爺さまで、他の竜達からの信頼も厚い纏め役

・仔竜×4

まだまだ幼い仔竜四体。いつも仲良く四人一緒に遊んでいる  
一応設定されている名前はそれぞれ、透（風竜の男の仔）、雅人（  
木竜の男の仔）、御影（闇竜の女の仔）、晶（地竜の女の仔）

### 《獣人・亜人族》

主人公達『完全なる世界』によって創造された新たな種族、その1  
煩惱と人手不足解消目的という、ある意味趣味と実益を兼ねた研究  
によって誕生した魔法生命体

初期は命令をこなすだけの人形のような存在だったが  
どんどん改良され、ヒトと殆ど変わらぬ自我を持つに至った  
研究者達の無駄なこだわりから、美少女率が高く、男より女の方が  
強い。以下戦闘能力の簡易比較

美少女・美女 <少女・女性 <幼女・男の娘・老女 <越えられ  
ない壁 <紳士 <マツチヨ <青年 <少年・爺

獣人と亜人の間に本質的な差異は無く、動物的特徴（獣耳や鉤爪、  
肉球等）の強い一族を獣人族

それ以外の特徴（エルフ耳や2本以上の腕を持つ等）の強い一族を  
亜人族と呼んでいるにすぎない

現在は『魔法界』『裏界』の開拓者として生活している

### 《自動人形》

主人公達『完全なる世界』によって創造された新たな種族、その2  
獣人・亜人同様に、煩惱と人手不足解消目的から誕生した、文字通  
り自ら動く人形である

この世界初のメイドでもある。そのため、女性しか存在していない  
共通規格のボディの各部を目的に合わせて換装でき

‘主のいかなるご要望にもお応え出来る’が謳い文句

人工知能の開発が難航し、不完全な頭脳を積んだ試作型も存在したが人工知能完成後は、順次アップグレードを行っており、順調にその数を増やしている

基本的に、戦闘メインの『戦うメイドさん』と日常メインの『御奉仕メイドさん』の2系統に分類できるが

主目的である事務の人手不足解消のため、『御奉仕』系の方が多いなっている

また、名前は花・植物由来のことが多い

#### ・サクラ

完成した魔術式人工知能を積んだ侍女式自動人形第一号

犬耳カチューシャとシンプルなエプロンドレスを纏う、小柄な『御奉仕メイドさん』

他者と触れ合い、経験を積むために、他の職員のサポートを受けながら、事務の受付で仕事している

感情面が未発達で無表情気味だが、生まれたばかりのため、無垢で様々なことに興味津々

仕事が無い時は、近くに居る誰かの後を付いてまわり、何でも真似ようとする

事務班のマスコットの存在として、今日も癒しを振りまいている

仙人界：中国奥地に暮らす、気を応用した仙術を用い、限定的ながら不老不死に至った仙人の勢力

#### ・??? ナタ

転生者。チート版??として誕生し、正史通りに一度死亡

蓮の化身として真つ当に復活するところを、主人公達の介入で魔改

造された

以下はそのスペック

・チート能力（怪力・再生能力などが確認された。本人が黙っているで詳しくは不明）

・眼からビーム発射可能

・魔改造風火輪ふうかりんで陸海空を結構自由に移動可能

・手首をドリルに変形可能

・肘から先をロケットパンチとして飛ばせる（乾坤圈けんこんけんの機能を内蔵した）

・骨格を組み替えて、戦闘機や戦車に変形可能（戦車砲や装甲などは寶貝が変形して担当）

・支援メカ寶貝（ガン ムXのGファ コンみたいな奴）と合体可能  
変形時も合体可能。変身時は似合わないから、と合体できない設定に

・内蔵武器として、肩口に収納されているビーサーベルや胸部が開いて現れる大型荷電粒子砲

腕部には火炎放射、ペンシルミサイルが格納されている

・外見はぱつと見美少女の無表情気味少年。若干長めの髪は赤毛で首の後ろで尻尾みたいに括っている

・通常時はリミッターがついている状態で、解除すると正統派魔法少女（笑）に変身する

変身時は核である霊珠（のダミー）が胸から顕れ、それが魔法少女の杖に変形？ する

攻撃も、それらしいエフェクト（命中時や発射時に とか、 のような発光、鈴の音のような効果音など）

が入るように設定されている（改造に掛かった時間の8割が、これに費やされた）

ちなみに、本来の変身である三面八臂は「可愛くない」という理由で削除された

敵味方がばんばん死んでいく封神演義の時代の中

人前でリミッターを外さずに済むように、必死に修行し、戦闘をこなしていたものの

最終決戦でやらかしてしまい、敵味方からの生暖かい視線に、居た堪れない思いをしたそうなの

今後也更に改造されるっばい

## オリジナル登場人物設定（後書き）

他のオリジナルキャラや改変された原作キャラなども、登場し次第、追加していきます。

2011・07・14 主人公勢の設定を改訂版に修正。

## ブログ：テンプレ？な展開（改）（前書き）

この作品には原作崩壊・キャラ崩壊が存在する可能性が在ります  
また、作者の独断と偏見による解釈・描写が多々存在します  
これら及び、転生・チート・オリジナル主人公といったものに興味  
の無い

または、許容できない方はブラウザの「戻る」ボタンで引き返して  
ください

それでも構わない、という方は

しばし、この作者の駄文にお付き合いください

## プロローグ：テンプレ？な展開（改）

プロローグ：テンプレ？　な展開

極々平凡に生きた一人のオタクが死んだ。

アパートでの一人暮らし。最低限稼ぐためのアルバイト以外は部屋に引きこもり、

不規則な生活リズム、不摂生な食生活を送っていた彼は身体を壊し、  
現実<sup>リアル</sup>に親しい知人が居ないことから独り衰弱し、あっさりと息を引き取った。

享年28歳。

その魂は、神様の気まぐれから、輪廻の輪に加わることなく狭間の世界へと招かれた。

「めなさ……………よ……………覚め……………」

ん？　誰かが呼んでいる……………？

呼び声に導かれ、芒洋と漂っていた意識が徐々に覚醒に向かって浮上していく。

「さあ、　よ……………目覚めなさい」

何度目かのその呼び声を、ようやくはつきりと認識し、重たい瞼を開くと

目の前には、今まで見たことも無いような美少女が浮かんでいた。

これは、夢……か？

自分にはまるで縁も無いと思われる美少女が、自分を目覚めさせる（それも宙に浮かんだ状態で）などという

頬を抓りたくなるような状況に、半ば夢見心地のまま、心中でポツリと呟く。

「夢ではありませんよ」

喋っていないのに返事が返ってきた？……何なのこの人？

「いえいえ、ただの暇してる神様です」

かみ、さま？……お上、髪、紙、加味、噛み、咬み……神？

まさか、自分〓神だと言いたいのだろうか？ この人、頭が逝っちゃってるんじゃないの？

まだあまり回っていない頭の中で、‘かみ’に符合する文字を並べながら思う。

いくら美少女でも、あまりイカレタ人とはお近づきになりたくは……でも美少女だしなあ。

あれ？ 今のも口に出してなかったはずなのに、会話が成立している？

「信じてませんね……しかも人のことを逝っちゃってるとか、イカレタ人だとか酷い言い草ですね。

それに、喋ってないというよりは喋れない、と言う方が正しいと思いますよ。

今のあなたは魂だけの存在ですから」

……え？……………なんと、仰いました？ 今……

今信じられないことを笑顔でさりとと言わなかったか、この人？  
いやいや、まさか、そんな、ねえ……

「おまえはもう、死んでいる！！  
それでね、あなたにちょーっと異世界に転生してもらおうかと思っ  
て」

儂い希望を持って聞き返してみたが、返ってきたのは  
なんというか、どっかで聞いたような台詞とイイ笑顔。  
慌てて自分の身体を確認しようとするが、認識みえるできるのはほんのり  
白みがかった蒼い炎だけ。

マジだ、なんか身体を見ようとしても、蒼白い炎が見えるだけ  
……って、人魂状態かよっ！！

ネットで見かけるような転生系SSでよくある神様の手違い、  
とか……

そんな訳無いですよーあははは……は、は、はは……

「うん、あなたは普通に生きて、寿命に則って死んだから」

じゃあ、なんで？

「転生とか考えていた時に、ふと、眼に留まったのがあなただった  
から。」

……ぶっちゃけると、選び直するのも面倒だったし」

おーい……それでいいのか神様よー

自称神様の美少女の、あまりにも適当な対応に乾いた笑いが漏れる。神様とやらが何柱いるかは知らないが、こんなのばかりだったら宗教家が絶望するな。

いや、発狂するか？ そんなどーでもいい思考が頭を過ぎる<sup>よ</sup>。

「世の中こんなモノよ……ま、運が無かったってことで諦めて」

それで、わたくしめにどーしろと？

「貴方の居た世界の、漫画に良く似た異世界、その可能性の一つである平行世界に投げ込むから適当に原作ブレイクかましちゃって……私はそれを肴に飲むから（ボソッ）」

あー、はいはい……それじゃ、何か能力もらえませんか？

ひ弱な現代日本人としては、何らかのチートスキルがないと生き残れない世界も多いと思いますし。

って、どの世界に転生するんですか？

「チートスキルは別に構わないけど、どの世界かは気づくまでのお楽しみ……適当に頑張ってね？」

ちなみに、その世界には他にも何人が転生者を投げ込んでみる予定なので、頑張って生き残って。

で、どんな能力が欲しい？ 容姿の変更も受け付けるよ。

無制限はちよつとアレなので、容姿以外で、チート能力を5個まで許可しよう」

よし、前々からちよつと興味のあつた女の身体に……でもムスコと離れるのは寂しいので、

フタナリ少女にしてください。できればムスコのサイズはある程度変更可能に。

「……………本気？」

この際だからと、欲望全開で逝つてみた。

ついでに、あまり見かけないフタナリとやらを試してみようと思つて申請すると、

白い眼で見られた……呆れた、という感情がビシビシ伝わってくる。だが、こつちも退けない。TS転生は男の浪漫……浪漫か？

いやいや、こんな機会なんて早々在るもんじゃない、逃してたまるか。

確かに子供からスタートの場合、現実問題として、イジメとか、ハブられたりとかあるかもしれんが

転生者としての記憶引継ぎや、チート能力があれば耐えられるだろうし。

成長済みでのスタートなら、裸を見られるなんて、公衆浴場ぐらいしかないはず。

そう考えて発言(?)する。

本気です！ だって、身体を男女切り替えできるとかじゃ、在り来たりじゃないですか！

女の子と男の子、どちらも味わえるお得ボディ……なんで選択する人が殆ど居ないんですかねえ？

「……………ま、まあ、いいわ……………それで、他には？」

サラサラの蒼髪、ついでに蒼眼で、綺麗というより可愛い系の小柄な身体で、

できれば胸も…若干あるとうれしいかも。美乳って感じで……あと、鍛えてもあまり太ましくならない身体にしてください。

あ、ファンタジックな髪や目の色が無い世界の場合は、黒髪黒眼でお願いします。

自分の好みの女の子をイメージしてお願いしたが、良く考えたら、これ自分の身体……ま、いっか。

さてと、チートスキルはどんなのにしようかね？

「ふむふむ、意外とまともね。じゃあ、能力はどんなにする？」

うーん………心身の完全制御能力ってできますかね？

自分の身体を、意図したとおり、齟齬無く運用できて、身体の無意識の活動、

治癒とか身体の代謝とか、あと神経系に干渉することができて感情の抑制や、意識の加速、分割も出来れば良いな………なんて………

「欲張りすぎじゃないの？ それは……」

その能力を一つの枠で取りたいなら、能力使用後の反動とか制限を設定しないとダメね。

まあ、分割思考や高度な身体操作については、一般的な肉体でも出来なくはないことだから、反動は無しでも良いけど、

例えば……思考加速を行った場合、神経系へ負担をかけるんだから、使用後しばらく行動不能になるとか、

治癒の速度を速める場合は、負傷部位を活性化させるわけだから、速めた分だけ痛みが増すとか、

体力を消耗するとか、そんな感じね」

やっぱり制限付けないとダメですか……

細胞分裂や老化を制御できれば、擬似的な不老不死も再現でき  
て、

意識加速や分割系能力もついでに取得できると思ったんですが

……

それでは、枠が余ったら反動無しで、余らなかつたら反動有り  
をお願いします。

「……老化や治癒に関しては、多少は制限を緩めましょう。

長生きしてもらった方が、こっちとしても楽しめそうだし……それ  
で、次の能力は？」

動植物とか、居るなら精霊とか、そういったモノに好かれやす  
くなる技能って出来ませんか？

野生動物とか精霊と戯れることが出来たら楽しそうですし、

幻獣とかとも居るなら仲良くしたいですし……必要となったら  
狩って食べることになるんでしょうけど。

それに、植物に好かれたら、食べれる木の実とか薬草とかを見  
つけやすくなりそうだなあ、と……

「うーん、理性の薄い存在に対する魅力を付ければいいのかしら？  
人に対しては効果が出ないレベルで良いのよね？」

あー、うー、それは……い、いや、ちょっと、初対面で好  
意的に見られるくらいの効果を。

「はいはい、それで次は？」

解析系の魔眼を……物体の組成や、相手の動きが読めるモノを。

あと、使いこなすのが難しい代わりに、習熟度次第では相手の魔法や能力の解析も可能で、

それを自分で再現できる、みたいな感じで出来ませんか？

モノ造り、伝統舞踊などの非戦闘系技能の習得にも応用できる設定で。

あ、魔眼発動時は瞳の色が真紅に染まる、とか……

なんか、自分で言ってる厨二臭すぎて死にたくなってきた、やっぱやm

「わかったわ、発動時は真紅に染まる魔眼ねー……クスクス……了  
解、了解」

アッ——！ やめて——！ 真紅そのの瞳設定は——！！

頭を抱えて（今は頭どころか、身体自体存在しないけど）ゴロゴロと転げまわる。

自称神様は、イイこと聞いちゃった、と言わんばかりの、ホントに楽しげな表情でクスクス笑っている。

ハアハアハアハア……へ、変更を……せ、設定の変更を……

「クスクスクス……こんな面白い設定、誰が取り消すのですか！ 鏡を見る度に、自分の黒歴史と対面するがいいわ！」

フッフッフ、フッフッフッフ、アーハッハッハッハッハッハッ  
ハ！」

ガハッ！！

た、確かに、要らんこと口走った俺の自業自得かもしれないが、死者

に鞭打つような真似をするとは……

こいつ、神なんて上品な存在じゃなくて、悪魔の類じゃなかるうか。今の俺に身体があつたなら、おそらく、シクシクと漫画チックな眼の幅涙を流しているに違いない。

「アーハッハッハッハグッ！ ゲホゲホゲホッ……あー、笑つた笑つた。

ま、高性能、但し習熟度制限有りの魔眼ね。これなら枠一つで済むわね。

それにしても、伝統舞踊ね、そんなのにも興味があるんだ」

そこまで笑わなくても……まあ、モノ造りに応用できれば、便利道具作成も可能になるでしょうし、

作中に出てこない民族音楽とか、踊りとか、意外と面白そうですからね。

「いいでしょう。それじゃ、魔眼の習熟度について、

LV1では相手の動きが少し先読みできるくらい。

LV2で先読み能力の向上に加えて、魔法や体術などの初級技能の解析が可能に。

LV3で中級技能の解析、初級技能の再現。

LV4で上級の解析、中級の再現。

LV5で最上級の解析、上級の再現。

LVMAXで最上級の再現が可能になるって感じにしましょう。

RPGのLV上げみたく、LVが上がることに伸びにくくなる設定で。

モノ造りなんかについても同様に。ただ戦闘系より伸びやすくしとくわね」

分かりました。

えーっと、残り二つか……折角だから、汎用性を追及しまくってみよう。

ということで、残りの二つの枠で、学習して成長し、能力の幅が広がる式神を二体お願いします

「具体的な能力はどんな感じにするの？」

基本人型で、初期能力は無機物への変化のみ。

実物を見れば、動物等への変化も可能に……

あと、黒と白の二体で対になっていて、

黒い方が陰、マイナス、負、影等のイメージに関わる事象を学習、蓄積して能力を取得します。

白い方が取得するのは、陽、プラス、正、光といったイメージに関わる能力ですね。

戦闘時には変化能力でオレの武器になって、もしくは援護役として戦う感じで。

育て切れれば相当なチートですけど、最初が激弱なんで見逃してください。

「それは確かにチートね……確かに最初は激弱だけど………うーん、やっぱり制限を掛けます。

この二体の能力で起こした事象は、対になったもう一体の能力で辻褄合わせをしなければならない」

例えば、黒で冷却熱量を奪ったしたら、白で加熱放出しなければならない、  
みたいな感じですかね？

ううむ、流石に代償無しで、無茶苦茶なチートは無理か……まあ、枠一つ分だしな。

複数の枠を使えば中二病ちっくな『EFB』や、もっと上げつない

能力を乱発可能にできるんだろうけど、この式神sで『EFB』を再現しようと思ったら、その後に、炎の嵐を巻き起こさなければならぬのか……  
なんか、かなりはた迷惑な能力になった気が……

「そうよ。対になった能力が足枷になるから、片方だけ能力を取得しても、まともに使えない。」

もし無理に使った場合は、何らか代償を支払ってもらうことにしましょう。

体力・魔力の消耗や身体、精神へのダメージなど……

代償は、起こした事象の大きさに比例して、重いものになるよう設定するわね。

一応、一定の割合／時間で反動を分散させ、一度に受ける負荷を減らせるようにしておくけど、

多用して積み重なれば相当な負担になるから……気を付けることね」

了解しました。あ、結局枠は余らなかったんで、心身の制御の反動は有りってことでお願いしますね。

「はいはい。それじゃ、確認するけど、フタナリ可愛い系美少女で、

心身の完全制御（反動有）、理性の薄い存在に懐かれやすくなる魅力持ち、解析系の魔眼持ち、

成長する式神二体の五つのチートスキル。これで問題無いわね？

それで、いつごろに行きたい？」

あ、はい……… それでは、地球誕生の頃に。

「……………は？」

いや、星の誕生や古代の生物を実際に見る機会なんて普通無いですし……折角のチャンスなので。

それに、式神に学習させる際に、実際に氷河期とか体験させたら、

より強力な能力を取得できそうだなー、と思ひまして。

「ホント変な子ね……いいわ、簡単には死なないでちょうだい。

式神を上手いこと使って、身体の潜在能力を全開にして、魔眼を活用できれば、

何とか生き延びれるかもしれないし……

まあ、いきなり過酷な状況からのスタートだから、そこそこ成長した身体にしておくわね

じゃ、新しい人生頑張つてね？ 逝つてらっしゃーい」

あれ？ そういえば、地球誕生の頃って、大気のある場所なんて存在しないし、

いきなり宇宙空間に放り出される訳だから、

思いつきで言ってみたけど、俺、一体どうやって生き延びれば……

そんな今更な思考をぶつた切る様に、

俺は……足元？ に開いた穴から落下した。

一気に手を振っている自称神様の少女の姿が遠ざかっていく。

何で人魂なのに落下するの！！？

それが、狭間の世界での最後の記憶だった。

続く？



## ブログ：テンプレ？な展開（改）（後書き）

ほとんど、こういったものに手を出したことが無いので拙いものか  
と思います

更新速度もゆっくりしたものになりそうですが、どうぞ気長にお付  
き合ってください

2011・07・11 改訂

一部の設定を変更して、中途半端だった内容を加筆修正しました

## 1話：初っ端から命がけ（改）（前書き）

さて、主人公が落とされたのは、地球誕生間近の小惑星や、塵、氷、ガスなどの集まる渦の傍。

さあ、物語の開幕です……どうぞお付き合いください。

## 1話：初っ端から命がけ（改）

1話：初っ端から命がけ

意識がハッキリした時、私は小惑星？ や隕石？ が渦巻きながら  
一つに纏まっていく空間目掛けて、  
一直線に落下していた。

巨大な岩や氷の塊が高速で飛び交う様は、生半可な絶叫系アトラク  
ションなど目じゃない恐怖だ。

空気が無いため、遠距離の物がぼやけたりしない宇宙空間では距離  
感が掴みにくく、

遠くで点のように見えていた物が、

数秒もしないうちに目前に迫ってくるという状況は、神経が削られ  
る気分だ。

自分の考えと齟齬無く動くこの身体のおかげで、手足を叩きつける  
ように隕石を受け流し、  
に弾き飛ばされ

辛うじて直撃だけは免れているが、無理な受け流しによる手足の負  
傷に加え、酸欠になりつつある。

また、真空中の極端な温度差、宇宙線、体内との気圧差でもダメー  
ジが蓄積しつつあり、

治癒の副作用による痛みの増幅のおかげで意識が飛びそうだ。

もう痛いと言うより、焼け付くような感じで……死がどんどん近づ  
いてくるのが実感される。

（マズッ！！ このままじゃ押しつぶされる！ それ以前に、空気

が無いのでマジで死ぬ！！

半自動で治癒が働いているおかげで身体はまだ保っているけど、脳がやられたら終わる！！

えっと、今使えそうな能力は……式神？　どうにかして安全地帯を確保できないか！？）

と、主人の危機意識に反応したのか、白と黒の一对の符が現れ、ポーンッ！　と音を立てて変化。

私を取り囲むように、大極図みたいな球形の結界にを形成する。

しかし、内部にも空気が無いので、肺の機能を操作。

肺の中に残っていた呼気に含まれている酸素の残りを、赤血球で必死に取り込み、

無理矢理二酸化炭素を体外へ放出する。

しかし、焼け石に水……このままでは、酸欠で死亡するのは免れない。

隕石に轢かれ、弾かれて跳ね回っている結界内で、酸欠気味故に上手く働かない頭脳を必死に回転させる。

周囲で使えそうなものが無いのか、魔眼を発動させ、調べてみる。

Lv1だと少々厳しい内容なのか、

発動の負荷によって眼球周辺の血管が切れたらしく、血涙が頬を伝った。

幾度かの解析失敗の後、隕石同士の衝突で起こる高熱による融解と水素を主成分とする分子雲での核融合反応が確認できた。

この中で今利用できるのは、核融合反応くらいのものか……

ということ、魔眼を全力起動し、反応を詳しく解析、その内容を式神に学習させていく。

エネルギーを発すると言う点で、どちらかと言えば陽の領分、になるのか？

でも、対となる反応として思いつくのは核分裂反応だ。

分裂と融合で陰と陽を分けるとすると、融合は陰になる？ 気がする。

まあいいか、とりあえず反作用でのダメージ覚悟の上で核融合反応の再現して、

早く酸素を手に入れねば……

陰《黒》の式神を介して結界内の分子雲の密度と温度を高め、重力収縮を起こしていく。

重水素の核融合によってヘリウム3が生じ、徐々に軽い元素から重たい元素を発生させていく。

まだLv の上がっていない魔眼での解析では不十分だったのか、数多の試行を繰り返し、幾多もの失敗を重ねて、ついに酸素原子の生成に成功！

ようやく結界内に酸素が満ち始めた。

分子雲の重力収縮の影響、核融合反応で生じた放射線での被爆、及び式神使用の反動によって、

襦袢雑巾の様になった身体は、治癒能力を加速させた反動での痛みの増加もあって

もはや痛みや熱さ等の感覚が無くなってしまった。

どうやら神経感覚の許容範囲を超えてしまい、すっかり麻痺してしまっただけらしい。

改めて体内の状況を確認すると、遺伝子を修復しきれずにあちこちで癌細胞が発生してしまっている。

仕方が無いので、細胞分裂や血流のルートを制御して、癌細胞を人為的に壊死させることで対処。

しかし、まだまだ不足している酸素を生成するために核融合を続けているので、

身体を治しても、すぐに放射線で焼かれてしまい……なんというかイタチごっこになってしまっている。

ただ、結界内を大気で満たすことが出来れば、

せいぜい二酸化炭素の分解と酸素の生成を、酸欠にならない程度にやればいいだけだから、

治癒と被爆のエンドレスリピートからは抜け出せるだろう。

確か、新生代の地球の大気組成は窒素約八割、酸素二割で、アルゴンや二酸化炭素などが一分以下だったかな？

少量のアルゴン等は無視しても良かったはず。

酸素濃度が高すぎても人体に悪影響が出たはずだから、結界内の窒素濃度が全体の七〇八割、酸素濃度が二割程度になるように、

やはり何度か失敗を繰り返しつつ核融合で生成する。

おおよその感覚で一気圧の合成大気で結界内を満たすと、

安堵のあまり気が抜けて、ペタリと結界内に座り込んでしまった。

そのまま大の字に寝転んで、深呼吸を繰り返す。

一段落ついたと言っても、未だに外は隕石の嵐で、結界はガツンガツンと乱打されて居り、

ピンボールの様に跳ね回っているのだが……

ま、身体制御で三半規管を調整して居るから、酔っ心配は無い。精々、振動と激突音が煩いくらいのものだ。

「ぜーはーぜーはーぜーはー、げふっ、ごほっ……」

すー、はー、すー、はー……いや、マジでスタート直後に死ぬとこだった。

肺の中に空気が入ってなかったら詰んでいたな……

あれって、神様（自称）の最後のサービスだったのかな？

式神の変化のバリエーションに、俺が設定し忘れていた結界機能も登録していてくれたみたいだし。

やっぱり、武器ばかりあっても駄目だな…… 今後は防御も充実させるようにせねば。

まあ、これで一息つけ……あれ？ 何か星の中心に巻き込まれかけかね？ 私」

寝転がったまま、半透明の黒と白の結界の壁越しに外に意識を向けると、

先程までに比べて、周囲に存在する隕石の密度が高まっているように見える。

衝突の頻度も上がっていることから、

形成されつつある地球の中心のほうへと結界が流されているのは確実なようだ。

恐らく、原始地球の引力や周囲の小惑星や氷、塵との衝突、

ガスなどの星間物質の流れの影響だろう。

やっと一息つけたかと思ったら、次から次へと……もう少しゆっくり出来る時間が欲しい。

きちんと能力の確認も出来てないのに……

まずは、球形の結界の形状を一部変更。

地球の中心となる渦の方へ向けて、漏斗のような形を設定する。

そして、その漏斗の中で核融合反応を実行！

漏斗の広がった方へと核爆発のエネルギーが集中して、大きな推力

を生み出す。

機動戦士ガ ダムシリーズ等で出てきた、核パルスエンジンを真似た簡易ブースターである。

仕組みがシンプルなので試してみたが、地球のほうへと流れる小惑星などへの衝突が多発。

迷走してしまつて、まともに距離が稼げなかった……

ということとで、今度は人型のパワードスーツをイメージする。

身を守るための装甲と、動作を補助するための筋肉モドキのついた宇宙服のようなもの。

筋肉モドキは自分の身体を解析して、式神に学習させた。

隕石を殴ったり、蹴ったりできるように手足の装甲は分厚く設定。

また、弾き飛ばすための腕力・脚力を補うための筋肉モドキのせいもあり、

胴体に比べて手足が肥大した、アンバランスで歪シルエットな影。

なんというか不恰好なフォルムに愚痴がこぼれる。

「うゝむ……このかつこ悪い外見は、できればどうにかしたいものだが……」

今は生き残ることを優先しないとマズイしな……後回しか」

そうして、近づいてくる隕石等に対処しつつ、危険エリアからの脱出を開始する。

小さい氷塊などは手足の装甲板で受け流し、

自分より大きい小惑星などは一旦しがみ付いてから、反対側へジャンプ……

弾いたり、受け流したり、飛び移ったりと紙一重の回避が求められ

る状況に、気の休まる時がない。

魔眼で多少は軌道の先読みが出来るので、早めに対処が可能な一方で、

自分の置かれている状況に安全地帯など殆ど存在しないということも理解できてしまう分、

なんというか……気が滅入る。

激しい運動を始めたことで、酸素の消費が増えてきたため、酸素の生成にも思考を振り分ける。

酸素と炭水化物からエネルギーを取り込み、水と二酸化炭素を放出する代謝。

それを陽《白》の式神に学ばせ、陰《黒》の式神で反転、

大気生成の際の核融合で得た熱量で 水 + 二酸化炭素 酸

素 + 炭水化物 を実行。

なんというか、かなり無駄の多いやり方な気がする。

直接エネルギーを体内に取り込むことができれば、呼吸する必要は無いんじゃない……

でも、そこまで行ったら、もはや人間というか、生物と言えなくなってしまう気がする。

でもまあ、今はまだ手が離せないので、これも後回し。

ガンガンと降り注ぐ岩やら氷やらを殴り、蹴り、弾き、受け流して

……

たまに思考分割が乱れて隕石に轢かれたりしながら、地球の中に取り込まれないように直走る。

やはり、地球の数倍はある星間物質の渦を、この身一つで抜け出そうというのは、

いくら身体能力を底上げしていてもキツイものがある。

「あー、もうっ！　こんちくしょうー！ーっ！ー！！！！  
こ、ん、な！　早々にっ！　死、ね、る、かー！ー！ー！ー！ー！ー！  
！！！！！！」

なんとかかんとか、必死に生き抜きながら、時が流れた。

## 半年経過

初っ端から活用しまくっていた魔眼が、気づけばL V U P　して  
いたようで、

周囲の解析の際に感じる負担が減ってきた。  
隕石の軌道の見切りの精度も上がっているのが実感できて、なんか  
嬉しい。

式神にも意識が芽生えてきて、棒読みながらも回避時のアドバイス  
をしてくれるようになった。

パワードスーツ形態も色々と使い難かった点を改良していったので、  
初期のものに比べると、かなり洗練されたデザインに……カッコイ  
イは正義！

そうして半年もの間、必死に安全宙域を目指して駆け抜けてきた甲  
斐あって、

だいぶ周囲の危険物の密度が下がってきた。

我ながら、よくもまあたった独りで命懸けの弾幕ゲームを、これだ  
け長く続けられたものだと思う。

「ぬしさま、みぎつえからみつつきます」

「はいっ、なっ、とおっ！」

#### 数年経過

回避についての助言や、極限まで発動中の生存本能のおかげか、身体の効率的な動かし方を習得してきたように思う。

分割思考にも大分慣れて、二三分割は無理なくできるようになつて、

式神と無駄な会話をする余裕も出てきた。

最近では、周囲の星間物質を取り込んで噴出するスラスターも装備されたことで、

迫ってくる隕石を敵に見立てて、ガダムごっこに興じている。

「見える！ 私にも隕石<sup>てき</sup>の姿が見える！！」

「わー！、ぱちぱちぱち」

#### 十数年経過

単純作業の繰り返しのおかげで、魔眼のLvが上がらない。

このところ、地球の元となる渦<sup>二</sup>星周円盤の外周部に居るため、隕石に襲われることもかなり減ったからだ。

たまに地球軌道から流されかけるが、それ以外は平穏な日々を過ごしている。

おかげで、星が出来上がっていく様をのんびり間近で観賞できる。なんというか……ホントにスケールがでかい。

こんなものを見てしまうと、人の小ささが、思い上がりがよくわかる。

「世界は……宇宙は大きいね。」

ヒトは、この域にまで辿り着くことは出来るんだろうか……？

登ることが出来たとしても、どれほどの時間が掛かるんだろう……

……」

「はい、主様……嘗て主様が居た時代、その更に数千年以上先の時代」

「それでも辿り着けるかどうか……」

「……ああ、ホントに大きい、な」

数十年経過

流石に飽きた。

スケールがでかいのは分かっていたつもりだったが、出来上がりそうになってから、

地球の完成までがこれまた長い。

最近の窮屈な鎧から大極結界に切り替えて、

漸く見つけた安定軌道上を周回しながらゆったり過ごしている。

ただ、余裕ができたせいで、空腹に悩まされている。

太陽光の熱量を利用しての代謝の逆反応を行っているから、

別に食わなくても死にはしないが………なんと言つか、きつい。

核融合等で生成できるのは、塩や水といった簡単な構造の分子ぐら

いのもの。

空腹を満たすには物足りない。

しかし、水と光で酸素と炭水化物を体内で生成して生きている自分  
って、

なんだか植物みたい……

仕方が無いので式神sと言葉遊び等で時間を潰している。

「ほし」「ししつ」「つめ」「めんたいこ」「こま」……

百年くらい？経過

やっと地球が形になった。まだ地表はマグマの海みたいな感じで、  
隕石もちよいちよい降っており、

止まない嵐が吹き荒れて、人が住める様な環境じゃないけど。

式神sのおかげで寂しさは余り感じないが、原作が何にせよ、これ  
から46億年は経たないと始まらない。

地球誕生の頃に、なんて言った過去の自分をちよつとぶん殴りたい

orz

此処のところ、式神達に将棋やオセロなどを教えて、それで暇潰し  
としているが、

思考加速で分析・予測しても、最近はコンピュータみたいな正確な  
手を打ってきて、

勝つのがかなり難しくなってきた。

まだまだ子供みたいなところは残っているが。

ちなみに、オセロを式神同士で対戦させると、大抵の場合引き分け  
る……白黒の式神だけに。

「あつ、それ待ったです、主様」

「待った無し、でしょ？」

「そうそう、勝負とは非情なもの。はい、これで済み」

「あああああ、また負けた」

#### 数億年経過

地表も落ち着いてきて、最近は宇宙から地上に降りて過ごしているが、大気組成が現代とまるで違うので、宇宙に居た時と同様に、宇宙服代わりの結界&光合成が欠かせない。

月の形成の際の隕石激突「ジャイアント・インパクト」の時はホントに死ぬかと思った。

久しぶりの巨大隕石の激突……固まりかけていた地表を突き破り、溶岩やガス、砕けた地殻が宇宙に噴出し、月を形成する。

いつもは外からの隕石だったから、地球側からの災害は対応に慣れていない分きつかった。

必死に避けているうちに流されて、月の中に閉じ込められかけたのも、

今となつてはいい思い出、かな？

式神たちも、だいぶ個性がはつきりしてきた。

明るい性格のヨウ、物静かなイン。

……こら、そこ、ネーミングセンス皆無とか言うな。分かれば良いんだよ、分かれば。

あと、能力育成のためにも、私の嘗ての知識をちよくちよく教えて

いたのだが、  
それも此処まで来るとネタ切れ……殆ど（弱）が付く様な、頼りない能力だが、  
これ以上伸ばすには実際に経験を積むか、本格的に研究するなりしないと無理だろう。  
ただ、半分以上暇潰しとしてやっていた授業ができなくなったのは、きつい。

また、試行錯誤しながら効率的な身体の動かし方を求めて、我流の鍛錬もしている。  
某ハンター協会会長の真似事を、今後ずっと続けた場合、どんな感じになってしまうのだろうか？  
そんなことを考えて、挑戦してみてもいる………時間だけは有り余っているからね。

それに加え、飯が食えないのは相変わらずだが、ようやくと、砂糖？を生成することに成功！  
塩と水だけだった食卓に砂糖が加わった。いやっほーう………っ  
て私はバカテスの主人公かつ！！  
ヨウなどは感激のあまり涙をたらたら流していた。  
知識だけとはいえ、なまじ食事の素晴らしさについて教え込んでしまった分、  
美味しい物を食べたいという欲求が、相当に大きくなっていったようだ。

「主様………寂しい食卓に、ようやく、甘いものはなものが」  
「……スマン、こんな寂しい食事につき合わせて  
だが、いつか必ず！ 豪華な食事に辿り着いてみせる……！」

「はい、主様の居た時代の料理、期待してます」

「時間だけは腐る程あるんですから、きつと辿り着けます。

不肖のこの身、料理のためなら如何様にもしてくれて構いません！  
」

「よし、じゃあこの試作牛肉19826号、ちょっと食べてみてくれ  
若干組成が甘い気がするけど、意外といけるかもしれないし」

「はい！お任せあれ。では頂きます……ゲハッ」（パタリ）

「ヨウツ！　しっかりして！　ヨーーーウツ！！」

「マズイツ！　結界が歪む！？　ヨウ、しっかりしろ！！　おいつ  
！！？」

そういえば、文字通り死ぬ気で覚えた核融合による元素生成だが、  
下手に対人戦で使用したらとんでもないことになりそうだ、と今更  
ながらに気づいた。

弄れるのは、式神を介して、その上自分の周囲のモノに限られるし、  
世界観にもよるが、単純な核爆発程度なら凌ぎ切れる奴も居そうだ  
が、

今のままだと周囲への被害が怖すぎる。

どうにかして放射線を出さないように、反応を制御できるようにな  
れば、

某錬金術師ごっこができそうだから、他の転生者をだませたりして  
便利かも。

そんなことも考えたので、安全な制御方法の確立のため、研究を続  
けることにした。

おそらく、複雑な構造の物は無理だろうが、  
簡単な金属製品くらいなら練成できるようになるはず。  
まあ、戦闘時は単純な構造の刃物や長物を造るのが精々だろうけど。

そんなこんなで、更に時が流れる。

## 1話：初っ端から命がけ（改）（後書き）

原始地球の時代、変化に掛かる時間単位が億年スケール……

ホントに時間だけは有り余っているので、遊び半分のモノも含めて主人公達は色々挑戦中。

そのうち、何も無いところからフルコース料理を出してしまえるようになるかもしれません（笑）

思いつきに任せて、行き当たりばつたりに書いているため、今回はどう主人公を生き延びらせるか、頭を抱えてしまいました……結局大分無理のある内容に orz  
今後は注意していききたいと思います。

2010.7.14 改訂

プロローグに続いて大幅に加筆修正しました。

基本的な話の流れはそのままですが、台詞や行動描写等を追加、一部展開を変更しました。

## 2話：招かれざる客、到来（改）（前書き）

原作まで、まだまだかかりそうな感じです

恐竜登場が2億5千年前ですから……気の長い話です。ホントに

では、2話の始まり始まり

## 2話：招かれざる客、到来（改）

2話：招かれざる客、到来

現在、原作開始まで大体40億年くらい？

このところ、大雨が続いており、原始海洋が形成され始めているが、どんなことでも限度というものがあり、スケールが半端無く大きいこの時代……

何らかの変化に遭遇して、最初は感動を覚えても、長々と続くことで嫌気がさしてくる。

今回は降り続ける雨、止まない雨……その前も良い天気、と言えるようなものではなかったが、

薄暗く、ざあーざーと土砂降りが続くと、気が滅入ってくる。

そのため、最低限の鍛錬はサボっていないが、結界内に引きこもって、研究に没頭する日が続いている。

最近の研究テーマは穀類・野菜の作成。

肉については、この間やっと、パサついて、味気ないものだが、なんとか似たような物を作ることができた。

果物にも挑戦してみたいが、砂糖が作れている以上、後回しにしても問題は無い。

セルロースから食物繊維を、そして、しゃきしゃき歯ごたえのある野菜を……

「フフフフ……フハハハハッ、ハーッハッハッハー……」

「最近の主様、何か危ない人みたい（ボソ）」

「シッ！そんな本当のことを言っただめ（ボソボソ）」

原作開始まで38億年くらい？

原始の海で生命？ らしきものの発生を確認。

最近は顕微鏡代わりにしている魔眼を発動しないと、まるで見えな  
いサイズだけど。

ほんつとに小さな細胞未満の、どちらかと言うと増殖する機能を持  
った分子の集合体。

そんな存在、だけどきつと、これが始まり。

「……………でも、微生物を見ててもお腹は膨れない」

「嘗てのマスターの世界の正史の通りに進むとしても」

「多細胞生物の発生まで、あと30億年くらいかかるはず」

「それまでは、100%合成食品の研究しかない、か……………はあああ  
……………」

まだまだ遠き原作、それに伴う生命の進化を想うと、溜息がこぼれ  
る。

ちなみに現在の主なメニューは、

肉モドキの塩焼き、砂糖から合成した澱粉によるパンみたいなモノ、  
笹の葉みたいな野菜モドキ。

なんというか……………味気ない。

原作開始まで32億年くらい？

海中で色々とバリエーションが増えていたバクテリアの中に、藍藻を確認した。

これで光合成による酸素が……面倒くさい酸素生成ともこれでおさらば！

と、思っていた時期が自分にもありました。

藍藻はまだ数が少なく、海中に居るため、発生した酸素は海水中に溶け、

または金属イオンと結合して沈殿してしまい、大気中になかなか広がらない

大気に薄くとも酸素が広がるのは、数億年は先になる見込み……ぬか喜びだった or z

ただ、葉緑体の光合成のやり方を参照にして、酸素生成の効率が改善できた。

しかし……確かにまともな物が喰えない、酸素も足りない現状ではかなり便利な能力なのだが、  
なんというか、どんどん人から外れて逝ってしまっている気が……

それから、魔力や気と言った不思議パワーについても研究を始めた。自分の得た能力について考えてみた時、死ぬ前の世界の法則では説明がつかないものが多く、  
時間が有り余っている現状、調べて置いて損は無いと判断したからだ。

高速治癒の際、どこから傷を埋める材料を？ どこから細胞分裂を促進するエネルギーを？

思考・反応速度強化の際、神経伝達を早める要素となっているものは？

魔眼での解析の際、この眼は何を視ている？ 通常時は不可視の電磁波<sup>かり</sup>？

光を受けるだけでなく、蝙蝠のように何らかの波を自ら放って反響定位を行っている？

食事を必要としない式神の動力源は？ 魅力とは？ …… 数え上げればキリが無い。

説明不能の神様パワーでどうにかなっているのかもしれないが、この世界が漫画の世界に似ていると言う話なので、

魔法的なものやオーラ等が存在する可能性は否定できない。

そう考えると、自分たち転生者に与えられた能力も、

ある程度はそれに沿ったものになっていると考えられる。

そういう訳で、いろいろと世界に満ちる力、身体に備わっている力について、

魔眼で解析できないか、インやヨウといった式神、つまり魔法存在とでも言うべきモノに取り込めないかと

実験を重ねてみた。

この時期、様々なバクテリアがたつぷり存在するので、見つけた謎の力を注入してみたり、

生物実験ちつくなこともやってみた。やはり他者を観察できたのは大きかったのか、

最終的に魔力と気、らしきエネルギーの存在を確認できた。

宇宙も含むこの世界には、大気や星間物質などとは別に、魔素と名づけたエネルギーが満ちている。

私や式神sは、その魔素を取り込み、体内で使いやすい魔力に変質させて能力に用いているようだ。

これが判明するまでホントに長かった。

魔素を注入したバクテリア、魔力を与えたバクテリアなどで比較実験を繰り返し、

増殖速度がアップしたり、魔素に適合できずに死んだり、魔力では短時間のドーピングにしかならないことが判明したり、捕食能力が強化されたせいで、折角造った実験器具を食い荒らされたり……

そういえば、魔素に適合しすぎて、そこらの魔素をあるだけ際限なく吸収して、

身体の方が耐えられずに、最終的に自爆しやがったバクテリアもいたっけ……

境界内で研究していたから逃げ場が無くて、あの時は死ぬかと思った。そう簡単には死ねないけど。

気については、生物の持つ生命力が元となっているっぽいことを除けば、

詳しいことは全く分かっていない。

まあ、研究対象が調べ難い自分と、それに比べ極端に生命力の低いバクテリアだけだから当然か。

「さて、この魔力をどうにか利用できないか、実験を重ねることにしますか」

「主様！ 魔素獲得型バクテリア b o - s o u が急激に増殖を開始。このままだとまた外部へ被害が！」

「なにに！ くっ……仕方が無い。ヨウ、今回は培地ごと焼却処分。イン、データはきちんと残してる？」

「はい、問題ありません」

原作までだいたい24億年

初めての大規模な氷期（ヒューロニアン氷期）の到来。

結界の外は真っ白に染まり、吹雪と海洋凍結によって結界自体がまるまる埋まってしまったことも……

また、これによってインの熱量吸収能力の派生、冰雪系を習得できた。

エターナルフォースブリザード！ 相手は死ぬ……まあ、しばらくはその相手もいないんだけどね。

マグマの海を体験させて習得させた、ヨウの熱量放出能力の派生、炎熱系と併せて、

取れる手札の選択肢を増やせたのはありがたい。

ついで、古代の雪を用いた力キ氷にも挑戦した。

外は極寒の世界、そんな中暖かい結界に籠って冷たいもの。

それも、通常手に入らないような代物を食べる、というのは中々に優越感を刺激される。

……自慢できる相手が居ないことに気づいて、少々虚しくなってしまうのは秘密だ。

でも、ま、美味しい力キ氷を楽しく騒ぎながら食べれたから、良しとしますか

「主様！ おかわりっ！」

「……私もお願いします」

「はいはい」

原作開始までたぶん20億年

やっと大気中の酸素濃度が上がってきて、結界無しで過ごせるようになってきた。

式神sも人型を取って、その識りたいという衝動からか、ちよくちよく冒険に出かけたりしている。

人型時、インは黒髪蒼眼の、ヨウは白髪紅眼の童女姿をとっている。なんというか、小さい子が駆け回っている様子は心が和む。

が、この時代に敵など居るはずがない、と気を抜いていたのが悪かったのか、

招かれざる客  
邪神さんがいらっしやった。

ぼんやり空を眺めていたら、いきなり黒い巨大なものが降って来たので、

いつもの隕石か、と衝撃波を凌いだ後は意識から外してしまっていた。

そこを、着弾したモノから生えてきたぶつとい触手に捕まって、思いつきり放り投げられた。

「んにゃあああああ!!?」

地面に勢い良く叩きつけられ、ズサーッと土煙をたてながら数百m滑り、転がる。

「げほげほつ、えほつ……………くつそお、やってくれやがりましたね、この野郎……」

インっ！ ヨウっ！ 来なさいっ！……!」

「「はいつ!!」」

インとヨウを変化させ、右側に黒、左側に白を纏う。  
少々不安の残る防御を補うために、手甲、脚甲、胸当てを、  
そして、機動力を補うために一対の翼を……

さて、20億年かけた正拳突き的威力、得と見よっ!!!

気の力をたっぷりと拳に充填。

そして、自分の力の実験台になってくれる貴様に、感謝の思いを込めて!!

「はあっ!!!!!!!!!!」

ガッ!!!!!!!!!!

触手の群をかくぐつて、土手っ腹に叩き込んだ、音を置き去りにした一撃。

それだけで、相手の鱗が弾け、胴体にボンツと大穴が開き、その巨体を数百メートルも吹き飛ばした。

「\$&amp; p;%T、}+<=|\_}<\*,(>#{ }?|\_%|  
|-----|!!!!!!!!!!」

なんとも形容しがたい絶叫。聞いているだけで、気分が悪くなってくる。

そして、土煙の中から姿を現したのは、表現しがたいオゾマシイナ二カ。

強いて言うなら、触手が一杯生えた、直立する大トカゲ……  
先ほどの一撃による傷も、触手がウジョウジョと埋めていく。

………  
見ているだけで精神力が削られていく気がする………おうっ  
ぶ………

（へー、ハスターじゃないの）

いきなり頭に響く声………この声は、確か暇神ひまじん

（暇神ひまじんは酷いわね………折角助言してあげようと思ったのに）

そんなことより、今聞き捨てならないことをさらりと口にしなかったか、こいつ………

聞き間違いだと良いな、という儚い希望を持って改めて確認する。

「助言って？ ……それに、今さっきハスターって………」

（そうよ、クトゥルー神話でお馴染み、風の旧支配者、名状しがたいものの、ハスターちゃんです）

「まんまヤバイ邪神じゃないですかっ！！」

助言ってことは、弱点が何か教えてくれるんですかっ！！？」

（えーと、とりあえず再生しなくなるまで叩き潰せば問題無し？

というか、地球人がつつける弱点らしい弱点なんて無いし、今の貴女じゃ弱点狙いでも効果は薄いし）

会話？ の途中で襲い掛かってきた無数の触手を殴って、蹴って、かわして、もう一度懷に。

そして、恨み言と共に正拳突き二連

「役立たず——っ！！！！！」

ドガガッ！！！！

[illegible]

再び胴体にダメージを喰らい、雄叫びを上げ、触手や鱗の破片を撒き散らしながら、

一キ口前後の距離を吹き飛ばされたが、ハスターさんは堪えた様子も無く、再生を始める。

「.....はあああ——」

長引きそうな予感にゲンナリしつつ、長いため息を吐く。

ハスターも居るってことは、恐らくクトゥルーやナイアルラトホテップ、

アザトースなんかも居るってことで、侵略がてらに地球にやって来  
かねない。

（うん、ご想像の通り。連中の気分次第だけど、来る可能性は十分にあるよ。

あと、あんまり長く直視していると、SAN値直葬されるから、長引かせると不利だよ）

「……………聞きたくなかった」 or z

あんまりな世界に軽く絶望して、地面に突っ伏す……………が、現状を思い出し、

必死に気力を振り絞って、立ち上がる。

こんなところでリタイアできるか！ こっちに来てから未だにまともなものも食べれてないし、

動物達とモフモフも出来てないし……………

と、不満、未練を思い起こして、無理矢理に精神を奮い立たせる。

（じゃ、頑張つて。二十数億年ぶりの面白イベント、きつちりクリアして私を楽しませてね？）

ハスターの方を見ると、多少は本気になったのか、触手の周りに風を纏わせ浮遊し、

手足を振り回してはカマイタチを発生させ、周囲に無駄な破壊を振り撒いている。

言うだけ言つて、さっさと見物に回つたらしい暇神ひまじんに呪詛の言葉を吐きつつ、

荒野での死闘が始まった。

相手の放つ巨大なカマイタチを、背の翼を全力でふるって回避。  
今の自分は効果が見込めそうな遠距離攻撃手段を持っていないので、  
相手の懐に入るしかないのだが、

風を纏わせて、攻撃範囲の広がった触手の群が邪魔をする。

風に巻き上げられた、小石や砂利まで襲い掛かってくるので始末に  
終えない。

もし生身で接触すれば、竜巻のような風と触手に轢かれてミンチに  
なってしまうていただろう。

仕方無く、相手の手を減らすために、触手の中でも風の纏い方が薄  
いものから殴り潰していく。

SAN値的に、本体だけでも余り直視したくないが、

下手に眼を離すと攻撃を避けられずに直撃、ゲームオーバーになり  
かねないので、

吐き気を堪えながら、一本一本、再生しつつある触手を減らしてい  
く。

……地味だ。かつこよく、なんて戦えない。

私は元一般人で、戦闘経験皆無なんだからしょうがないだろう……！！

……私は誰に言い訳をしているのだろうか……

と、SAN値が削られ思考が負の方向に傾くのを、脳内麻薬をドパ  
ドパ分泌して、

強制的に躁状態にすることで対処する。

何度か触手を受け流し損ねて吹っ飛ばされ、

カマイタチにも自慢の髪の毛を半分くらい持っていかれた。

式神sの鎧モードは相当頑丈だし、それで耐えられない攻撃に対し  
ては、

ヨウの能力‘斥力（弱）’で自分から反対側に跳んだりして受け流

す。

打撃はそれでどうにかなったが、カマイタチの斬撃はひたすらかわすしかない、

また早くて見えにくい攻撃なので、結構神経が削られた。

腕を持っていかけかけた際は、治癒能力を高めておいて良かったと心底思った。

脳や心臓といった主要器官を一度に吹き飛ばされない限り、大抵何とかなる訳だし。

途中から実験段階だった魔力障壁も試してみたが、サイズの差のせいもあって、余り意味を成さなかった。

あの巨大なカマイタチ相手では、一瞬は止めることができるが、すぐに突き破られてしまう。

……これが終わったらもっと改良しよう。

結局、SAN値をガリガリ削られながらの戦闘は、半年にも及んだ。

打撃では効果が薄いのか？　と思って斬撃で一部ではあるがバラバラにしてみた。

が、すぐに断面から触手がウゾウゾ生えてきて、バラされた破片同士が触手を絡ませ、元通りになってしまった。

周りの肉片の再生に巻き込まれかけた時は、ヒトとして何かが終わってしまう、そんな恐怖に駆られて必死に脱出した。

あの触手地獄は………もう！　二度と！　体験したくない！！  
触手プレイは、するのは兎も角、されるのは真っ平ゴメンだつ！！！！  
仕方無しに、打撃で少しずつ圧殺していった。

最終的に、インの「重力制御」で打撃の重さを弄って威力の底上げし、

インの鎧を介して「熱量吸収」+打撃による氷結破碎、ヨウの鎧を介して「熱量放出」+手刀による溶断を喰らわせ、じりじりとハスターの巨体を削っていった。

……真逆の能力を同時に、それも全力で振るったことによる負担はかなりのもので、

熱量を弄った手甲、脚甲の下は、制御の甘さのせいで火傷と凍傷でボロボロ。

それに、身体の左右で生じた温度差で、血流の流れにおかしな所も出てきている。

また、本来振るえない重さの攻撃を行った負荷で、何度か脱臼したし、

折れたり罅が入った骨も少くない。

戦闘終了後は、関節がシクシク痛んで全く身体を動かせない状態に……

鎧を纏っていなかった所は、顔も含めて打撲と切り傷、擦り傷塗れ。それに、一度攻撃を受け損ねたせいで、左足は膝から先が千切れてどこかに飛んで行ってしまった。

相手の攻撃を見切るために全力発動した魔眼は、手数が多い相手のせいで真っ赤に充血。

流石に、血涙まで行かなかったけど……眼が疲れた。

SAN値の方も大分削られ、最後の方では脳内麻薬の反動もあって半ばノイローゼになっていた。

脳内麻薬分泌は、使いどころをミスると反動が洒落にならない。

効果が切れると、躁状態から強制的に鬱状態に叩き落されてしまう。ヨウ達の励ましが無かったら、ホントにやられていたかもしれない。

ちなみに、身体の殆どを削られ、叩きのめされたハスターは……何故か金髪美少女の姿になって、泣きながら逃げていった。

「ああゝゝ、もう、邪神の類とは、いろんな意味で戦いたくない  
」

「主様、お疲れ様でした。」

「初戦闘、初勝利おめでとうございます。主様」

巨大な斬撃跡や、クレーターのような打撃痕の残る大地。

この一戦で、すっかり地形が変わってしまっている。

決着がついたという実感はまだ無いが、

身体はもう限界だったようで、気がついたらぐったりと倒れ伏してしまっていた。

式神sの温かい労わりの言葉が身に沁みる。

千切れた左足はヨウが拾ってきてくれたので、断面を重ねて高速治療を開始。

大腿骨、神経、動脈、筋繊維を繋ぎ治していく。

壊死した部分を掌握、生き残っていた細胞を増やし、傷を再構成していく。

なんというか、この半年ですっかり慣れてしまった、  
高速治癒の反動で増幅された痛みが、無事に？ 生き延びれたこと  
を実感させてくれる。

インに膝枕してもらいながら、  
今まで張り詰めていた心が解きほぐされていくのを堪能する。

「ああ……」

「しばらくは、私たちがお世話するので」

「ゆっくり寛いでください」

「ごめん、ありがと………それにしても、あの駄神めえ」

邪神のことはもう考えたくない（SAN値的な意味で）ため、  
怒り（八つ当たりとも言つ）の矛先は暇神<sup>ひまじん</sup>へと向かう。

「助言とか言っておきながら、役に立つことは何も言わずに見物と  
か……」

「あの声の主は神様なのですか？」

「それにしても、威厳も何も感じなかったのですが」

「まあ、暇だからと、死人を好き勝手に転生させるような神だから」

「「はあ………」」

「それに、その方が面白いとか言って、この世界の何を何も教えずに放り出すし」

しばらく愚痴って、少々荒れていた気持ちを落ち着かせる。

それにしても、と疲労ゆえに回らない頭で考える。

邪神が登場するってことは、クトゥルー神話系ベースの物語？ デモンベ ンとか？

いや、邪神が美少女ってことは、にゃ 子さん系かもしれない。でも、転生者が複数居るってことで、その能力のベースとして、邪神が居る世界観が必要となったのかな？

うゝん、まだ確信が持てないな……邪神のことは頭の片隅に置いておくだけにしよう。

それにしても……疲れた。

そう思いながら、私は半年振りの眠りに落ちた。

## 2話：招かれざる客、到来（改）（後書き）

思いつきで邪神戦

混ぜ込みすぎて、原作が何だったのか、自分でも分からなくなつてしまひそうです（汗）

あと、戦闘描写が上手く書けない or z

こんなダメダメな作者ですが、見捨てないでもらえるとありがたいです

ついでに感想もいただけると励みになります

では、また次回

2011・07・14 改訂

設定変更に伴い一部展開を変更しました。

### 3話・日常に混じってくる、要らんモノ達（改）（前書き）

まだまだ原作の時代に届かない

早く他のキャラを出したいものです

それでは、第三話の始まり始まり

### 3話：日常に混じってくる、要らんモノ達（改）

3話：日常に混じってくる、要らんモノ達

ハスターちゃんを撃退してから大分経った。

あれから、偶に来る邪神を撃退するのが自分の仕事、みたいになつてきた。

どうやら、地球には齒ごたえのある相手が居る！ と、

連中に目を付けられてしまったようだ、とかなんとか駄神がほざいてた。

原作開始時までに邪神連中をどうにかしておかないと、

このバカども

ラブコメ系世界だった場合、主人公達のデートの最中に邪神襲来！

なんてあつた日には世界観が粉々だ。

いや、それも原作ブレイクに……なる、のか？

そんなこんなで、

修行、研究、冒険、時々邪神な日々を過ごして、

今は大体原作まで10億年、といったところか……

体術の修練は、結界外でも自由に行動できるようになったため、正拳突きや筋トレだけでなく、式神sと模擬戦を行うなど、実践方面に移行している。

無茶が効く身体ゆえ、基本的に何でも有りのルールで、

隙さえあれば目潰しやら金的狙いの一撃が飛び交う過激なものだ。

最初の頃は、なんというか、大人しい、『試合』染みたお上品な稽古だったのだが、

対邪神戦を経験して吹っ切れた。

今では、実戦じゃ敵は待つてくれない！ 追い討ち上等！ な『死合い』って感じに……

また、格闘漫画やゲームの記憶を掘り返して、使えそうな技を試してみたり、

動き方を観察しあつて無駄を省いたりと改善を続けている。

いや、一撃で脳か心臓を消し飛ばされない限り、時間をかければほぼ元通りに再生できるし、

人の限界まで活用できる身体ゆえに学習効率も半端無い。チート万歳。

その上、修行に費やせる時間がたつぷりとあつたおかげで、

今ではミリ精度で狙った場所に、どんな体勢からでも打撃技を叩きこめるようになった。

まあ、ここまで真面目に取り組んできている理由は、

修行や研究でもしてないとやる事が無さ過ぎて、ホントに暇で暇で、

精神的にマジで死にかななかったから、なのだが……

あと、鉄の棒や、鈍らではあるが剣の類等を生成して、棒術や剣術、弓術等も自己流ながら鍛錬している。

気の制御についてはほぼ問題無い。身体強化での課題は被弾時の制御の乱れを修正するくらいか？

気弾といった体外での運用にも慣れてきて、放出時のロスをもっと減らすのが今後の課題だ。

また、気は傷の回復や老化の抑制にも応用できることが判明。  
身体完全制御と併用すれば、高速治癒等の反動を大幅に減らすことが可能になった。

反動で痛みが増幅されることにもすっかり慣れてしまっていたが、減らせるならそれに越したことはない。

ただ、気は生命力由来のエネルギーなので、

魔力と異なり、使いすぎると生命の危険があるというのが難点か……

魔法の方は、並列思考を利用しての理論構築、検証実験を重ね、魔眼の解析能力を用いてバグ取りや無駄な書式の削除、効率化を進めている。

術式構造が単純で、複雑な呪文を必要としない、実用的なものを作ることができた。

模擬戦で運用試験もしているので、使い勝手が悪いものは篩い落とされる。

実際、命の掛かった実戦では、相手が格下でもない限り、悠長に長つたらしい呪文など唱えては居られない。

そんなこんなで、この数億年で更に向上した魔力制御技術もあって、以前とは段違いの強度の魔力障壁や、魔力を収束発射する射撃魔術を発動できるようになった。

派生で、家事や工作等に便利な、低威力の簡易版も幾つか完成。

ただまあ、召喚などの儀式系魔術までは手が回らず、

洗練されてない術式で、面倒臭い工程を踏まないと発動できないのだが……

まだまだ種類は少ないが、徐々に数が増えてきた精霊に力を借りる精霊魔術も研究している。

この世界の精霊は、自然界の現象に一定濃度の魔素が蓄積し、単純ながらも自律行動をとるようになったもの。

この精霊達、周囲から自分で取り込む魔素よりも、生物の体内で生成される魔力のほうが好きらしく、

魔力あげるから手伝ってと、呪文詠唱で呼びかけるとすぐに集まってくる。

そんな感じで精霊の力を借りると、通常の魔術に比べて楽に発動できることが分かった。

非精霊魔術では、発動工程を術者自身が全て制御しなければならないが、

精霊魔術は手伝ってくれる精霊達によって発動される分、術者に掛かる負担が小さいのだ。

ただ、意思疎通を完全にはできないため、細かい制御が殆どできないという欠点が……

ついでに、邪神の攻撃方法の解析&模倣も試みている。

とはいえ、こっちの作った術式と規格が違いすぎて、一部を劣化再現するのが精一杯な上、

物騒なものばかりで使いどころが限られる感じなので、熱意は薄い。それでもSAN値直葬だけは洒落にならないので、精神防壁の改良は重ねている。

未だLv3の魔眼では解析が不完全にしか出来ず、

実際に精神攻撃を喰らってみるまで、どれだけ改良出来たかは分からないのだが……

数億年掛けたとは言え、独力でここまでやったのは自慢しても良いと思う。

ま、そういうことで、邪神撃退も強力な遠距離攻撃の習得で、多少

は楽になった。

回避や防御をミスると、身体はどこかを持っていけれかねないのは相変わらずだけど。

イン、ヨウの方も大分能力のバリエーションが増えた。

感知結界に大型の魔力反応が引っ掛かった。

久しぶりの邪神襲来のようなのだ。

「イン、ヨウ……弓と矢を」

「はい」

「了解です」

‘放出’、‘増幅’の性質を持つヨウの弓に、  
インの生成した‘侵蝕’、‘減衰’の性質を持つ矢をつがえる。  
更に呪文を唱え、風の速さ、氷結の性質を重ねる。

「疾！」

空から降ってくる、恐らく邪神さんと思われる影目掛けて一射、二射、三射……

放たれると同時に弓の‘増幅’によって矢が十数本に分裂、  
そのまま邪神の身体へ切れ目なく着弾していく。  
大気摩擦で真っ赤になっている身体を、急速に氷結、冷却されて、  
脆くなった部分が崩れ、落下と共にバラバラと剥離していく。

そして、着地の爆音と衝撃波が広がる。

が、ムクリと身体を起こす邪神の動きに、ダメージの影響は見られない。

バラバラ剥がれる破片の下からは、新たな表皮、触手などの器官が生えてくる。

邪神からしてみれば、身体の表面が剥がれる程度の攻撃でしかなかったらしい。

再生能力の‘減衰’も狙ってみたが、相手がでかすぎて効果が薄かったようだ。

‘侵蝕’で、ある程度内部までダメージは通っているはずなんだが、やっぱり力量不足？

まだまだ改善の余地有、ってことかね……

さて、どう対処しましょう？

露になった姿は長い鼻の生えた、鱗で体を覆われた蛸のようなカチ。

と、邪神の姿を眼にした瞬間、身体がズシリと重くなる。

髪の前などはピシピシと色を失い、固まっていく。

「くっ！？ 石化か？ 厄介な能力を！！」

治癒系の術式を全力で起動。対精神干渉抵抗術式も全開にする。

視覚から侵入してくる、呪詛にまで到達した形質に全力で抵抗する。

これは、SAN値を削られまくった第一回対邪神戦を教訓として、長い長い研究の果てに開発、改良してきたもの。

たぶん、吸血鬼の魅了とか洗脳、転生者のニコポ、ナデポなどもほぼ無効化できるだろう。

それくらい力を入れて造った代物……

だったのだが、石化を中和するのが精一杯で、SAN値直葬にまで

手が回らない。

汚いさすが邪神きたない

「はあああああああああつ！！！！！」

氣を強く保つために唇を嚙んで、氣勢を放ち精神を奮い立たせる。

そのまま風を纏って突撃！

重力制御の併用による、通常では在り得ない軌道を描きながら、黒く巨大な、鉤爪のついた籠手を振りかぶる。

文字通り、重たい打撃を伴う鉤爪の挟り込みに、肉が弾ける。

「& amp ;;\$ % # | ? . ¥ — , ! " # % & amp ;; + > ¥ @  
- : % & amp ;;" ) < | \* : # \$ ) & amp ;; ¡ ¡ ¡ ¡ ¡ ¡ ¡  
¡ ! ! ! ! !

邪神特有の精神にクくる奇声、攻撃に対する怒りの声か？

勢い良く触腕が振り下ろされる。

かわした横で、打撃につぶれた触手の先端が液体のように弾け、不定形になったソレが絡み付こうと襲い掛かってくる。

いくつかの触手プレイを思い出して、ゾツとしながら全力回避！

「スライムプレイもゴメンだー！！！！」

「主様！ 左からも！！」

「避けて避けて――！！！」

式神、sも精神的にクるものがあつたのか、あれ以来、触手やソレに類するものに対して、苦手意識を持つてし

まったらしい。

回避の補助がいつもより精密な気がする。

攻撃を喰らっても平気な頑丈な身体かと思えば、いきなり不定形になったり……

邪神って奴らは、まったくもって常識外の連中ばかりだ！

前もって対策を考えていても、ちっとも安心できない。

まあ、愚痴ってばかりも居られない。

「という訳で、気分転換にお遊び……ゲフンゲフン、実験装備展開」

「アレを使うんですね、主様」

「楽しみです」

一旦距離を大きくとって、仕切りなおし。

空間を歪めて造った定番装備、影の倉庫からまず引っ張り出すのは、どこかで見たような形の銃。

銃身内部には二重螺旋のライフリング。それに沿って刻まれるのは加速と収束の呪紋。

空間の許す限り、みっちりと繰り返し刻まれている。

撃ち出されるのはカートリッジに封入された、

魔術によって高エネルギーを与えられた、原子や電子、陽子といった荷電粒子。

荷電粒子が自身の持つ高エネルギーによって暴れ、ばらけ、

弾けようとするのを収束呪紋で押さえつけ、弾道、射程を安定させ、加速呪紋で弾速と威力を上げる。

それは、荷電粒子砲、すなわち『ビームライフル』

キウン

トリガーを引くと、ほぼ光速で放たれる荷電粒子が邪神さんに着弾。鱗を弾けさせ、肉を焼き、貫通して空に溶けるようにして拡散し、消えた。

銃本体を造るのにすつつ……ごく手間が掛かって、カートリッジ一個作るのに必要な魔力とか、一個のカートリッジでたった5、6発しか撃てないこととかを考えると残念な威力ではあるがそれでも、ミノ粉なんて無い世界で、お遊びで造った代物としては良い出来。

「見える!!」

伸ばされた触腕による攻撃をかわしながら、ガダムごっこを楽しむ。

うつむ、機動兵器同士の戦闘でないのが少々残念。存分に楽しみ、作り置きのカートリッジを使い切ると、次の実験装備を取り出す。

「えーっと、次は……」

現れたのは、大きな十字架を象ったモノ。

百キロを超える重量の金属塊……

それを身体強化と重心移動で影から引き抜き、抱えるようにして構える。

中央に象嵌された、髑髏を模したグリップを握り、操作すると、ジャコッ！ と、十字架の長い一辺が分かたれ、中から黒光りする

銃身が姿を現す。  
引き金を引くと、

ガガガガガガガガガガ！

切れ目無い銃声と共に、装甲貫通、炸裂の術式を仕込んで作った爆裂徹甲弾が撃ち出される。

もちろん機関銃の方も、銃身に呪紋を刻んで、弾速、射程共に魔改造してある。

その連射力で弾幕を張り、襲い来る触手を撃ち落していく。

弾が切れたら振り回すように反転させて、機関銃の反対側のカバーを開く。

現れるのは砲口、そこから放たれるのは尻から火を噴きながら飛んでいくロケット弾！

「ああ、なんかトリガーハッピーの気分が分かるかも……なんか楽しくなってきた

よし、あと二挺作って、トリップ・オブ・デスを……」

「主様！　しっかりして！　なんだか危ない人になってるよ！？」

そうやって、某マンガの神父の武器で弾をばら撒いたら、  
次の玩具を……

そんなこんなで、最後に引っ張り出したのは、  
杖とも銃ともつかない、棒状の何か。

音叉の様に別れた先端、杖と呼ぶに相応しい赤い宝玉、機械的なトリガーのついたグリップ。

ジャキリと構えて、魔術式を展開。

「全力、全壊……」

先端に光る円環状の呪紋帯が、砲身のように幾つも顕れる。

それはまさに、魔砲陣……

音叉の間には周囲の魔素を集め、魔力に変換した眩い光球。

それが呪文と共に魔砲陣で収束し、加速、砲撃として放たれる。

「……スター イトオ……ブレイカー……！……ッ……！」

一瞬視界が真っ白に染まる。

純粹な魔力砲撃、付加要素も何も無い魔力そのものの攻撃。

今までに与えてきたダメージも相まって、

ある意味魔法生命体と言えるであろう邪神さんの、

魔術的構造にもろに負荷を掛けることになったようで、

蛸みたいな形がデロリと崩れた……なんだか、見てるこっちが吐き

そうになってくる。

相手にも相当なダメージを与えることができたみたいだが、

お遊び装備を試すつもりで、ちょっと気を抜いていたのが拙かった。

もろに精神的ダメージを喰らってしまった。

頭がくらくらする、視界が若干歪んでいる様……な………気が

………

しばらくお待ちください

少女？ リバース中……

しばらくお待ちください

頭をガンガンと地面に叩きつけて、ようやくと正気に戻った。

相手のほうも、身体の修復を優先していたらしく、見苦しい状態になっていた所を襲われずに済んだ。

「おえ……えつぶ………イン、あちらさんの様子は？ うっ………」

「再生に専念していたようですな。」

削られた胴体よりも攻撃用の触腕等をメインに自己修復が行われた模様。

そのため、戦闘能力は6割強まで回復したようです。じきに行動再開しそうですね。」

「……今使える中で最大威力、最大効果を出せる攻撃は何だと思う？」

「不定形の姿をとれるということは、純粋な打撃、斬撃よりも、氷結系で固める、若しくは炎熱系で蒸発させるのが妥当かと。」

どちらも重力・斥力系より制御は安定しています。

雷撃系は麻痺と熱傷を与えるでしょうが、時間稼ぎにしかならないでしょう。

やはり純粋な炎熱系より熱量ダメージは低いと思いますし」

「やつぱさうなっちゃうか……でも、最初の一撃じゃ殆ど効かなかった、

ってことで、全力を振り絞らないと勝てないわね」

「はい」

「……ヨウ、しばらくお願い、凌いで……ふうー……氷  
精よ、集え」

「りょーかいです!」

大きく深呼吸して、眼を瞑る。

インの「熱量吸収」能力を全開にし、それを箆手に収束させる。  
呪文を唱え、氷雪・冷気の精霊も集めていく。

まだ制御が甘いのか、パキパキと周囲に霜が降りていき、吐く息が  
白く染まる。

目標以外に影響を与えないように、力を絞り込んでいき、

魔力回路を形成、箆手に刻んだ呪紋と併せて、更に冷気を集める。  
某ゲームのライバルキャラの技を真似たモノ。

それは、全てを止める術式。

絶対零度、それを叩き込む黒き箆手。

制御をミスって暴走などしない様に、丁寧に術式の構成を編んでい  
く。

邪神の行動再開を知らせる地響きを、一時的に意識から外す。

構成が完了するまでの防御はヨウに任せた。

だから大丈夫、私は奴をぶっ飛ばせる攻撃をきっちりと準備する。

振り下ろされる触腕、それをヨウの構成する鎧が解けて巨大な楯を  
形成。

楯に重ねた‘斥力’と、攻撃に対する角度でミシミシと軋みながら逸らす。

主に任された命を果たすために全力を尽くすヨウ。

防御している間に、形成した楯の裏側に刻んだ呪紋で火精や雷精を誘導、

相手の攻撃の合間を縫って精霊弾を放って牽制する。

徐々に距離が詰まって、攻撃の密度が上がっていく。

自身の形成する楯、装甲、鎧を軋ませ、罅割れさせながら、

‘斥力’‘炎’‘雷’等の付与した能力で凌いで、凌いで………  
そして

「ありがとう、ヨウ……後は任せて。

行くよ？ イン」

「はい」

籠めれるだけ籠めた、練れるだけ練った。

分子、原子の運動すらも止めてしまいかねない凍結の術式。

それが宿った黒い籠手を振りかぶり、

もう、すぐそこにまで来ていた邪神の胴体に……

手刀を叩き込んだ。

……………ピキッ

……………

その瞬間、音が消えた。

そこにあるのは、氷像。

真っ白に染まって、凍りついた巨像。

その巨体に、手刀を打ち込んだ地点から、

キシキシシシッ、と徐々に罅が広がっていく。

表面から少しずつ凍った破片が剥がれ、砕けていく  
そうして……

カシャーーーーーーン

澄んだ音を響かせて、白い雪のように砕け散った。

そして、煌めく結晶が舞い散る中、左手からインで取り込んでいた  
熱量を放出する。

天へ向かって立ち上る炎が、氷片に乱反射して、幻想的な光景を生  
み出す。

が、それも一時のこと。

放出する熱量を高めていくと、

そのあまりの高熱に、氷片、肉片が蒸発、プラズマ化して一瞬の燐  
光を残して消滅していく。

放出を終えた時、そこには打撃・斬撃痕や硝子状に溶け固まった高  
熱の跡が残る、

元もとの地形とはかけ離れた荒野が広がっていた。

「はああああああー……。やっと終わったあー  
お疲れ様、イン。ヨウも良く凌ぎきってくれたわ、ホントにありが  
とう」

「そんな……大げさですよ、マスター」

大きく息を吐いて、気を緩める

精神防護の術式も平常レベルに下げ、インとヨウも鎧から人型へ  
ヨウの方は無茶させたためか、髪は乱れ、身に纏う衣装もボロボロ  
になっている。

二人を抱き寄せて、頭を優しく撫でてあげると、  
とろーんと気持ち良さに表情を緩める。

（やつほー、お疲れー。ガタノトーア相手に頑張ったね？）

「またアンタですか……」

そこに掛けられる陽気な声、解放感に水を差されて顔を顰める。  
なんか、妙に機嫌が良さげだ。

ヨウの質問にもノリノリで答えている。

「ねえ、ガタノトーアって何？」

（クトウルの長男、自分を見た人間を石化しちゃうの）

「へー」

「アンタ、どうかしたの？ 陽気すぎて気味が悪い……」

（だって、久しぶりの邪神戦じゃない。結構見物だったわ  
気分が良いから、大抵の質問には答えるわよ）

「……じゃ、今回の邪神、これまでの邪神と違って本体？ が逃げ  
る前に、

きれいさっぱり粉々にしちゃったけど、大丈夫？」

（え？ そこに本体が居るじゃない……）

暇神の言葉に辺りを見回すと、クレーターの影に小さな蛸が見えた。  
熱量放出の際に茹ってしまったのか、灰色がかった体色が赤く  
なっている……

「これ？」

（そう。殆ど力を失って、戦闘能力や石化、移動、大気圏離脱もで  
きなくなっているみたいだけど。

一応、まだ生きてはいるよ）

「ふーん……ねえ、こいつと会話してみたいから通訳してくれな  
い？」

（会話？……別にいいわよ。ただ、向こうにあってこちらに無い概  
念や、その逆もあるから、

意思疎通できたつもり、になる可能性があるけど）

「……それでも良いから、お願い」

（はいはい）

おそらく地球初の星間会談。

その結果分かったことは、邪神さんたちは娯楽に餓えている、ということ。

自身の能力だけで大抵のことができてしまったためか、物を造る、ということが発展しなかったらしい。

暇潰しに他の星の奴と戦ったり、寝たり、食ったり……そんなことしかしてなかった、と。

その一環で、手ごわい奴が居る、とみなして地球に来るようになったそう……はた迷惑な。

最終的に、この星では色々なモノが生み出されるはずだから、文明が発達したら、出来るだけちよっかい出さずに、

例え来るとしても、人の姿を模して騒ぎにならないようにしてくれ、とお願いしたら、意外と喜んで帰っていった……それでいいのか、邪神って。

ちなみに、暇神は（折角の原作ブレイクフラグが……）と不満たらたらだった。

それでも、通訳をちゃんとしてくれているあたり、中々に義理堅い。

会談は考え方の違い、概念の有無などで相当長引いた。

言葉の意味を一から説明しなければならぬ場合もあったから、ホントに疲れた……下手をすると戦闘よりも。

文化が多少違っていても、言葉が通じるって、ホントに素晴らしいと再確認した気分だ。

だれか地球人、できれば現代日本人と無性に話したい……

ただ、この会談で、もう一般人の一生分、頭使って喋った気がする。しばらくは、何も考えたくない……

「ま、まあ、これで将来、文明に無駄な被害を出さずに済みそうね。じきに多細胞生物も発生するだろうし、ゆつくり出来ると良いな……」

「そうですね……食料の方も、もう少しでマスターの記憶にあるものに辿り着けそうですし、しばらくは研究に専念したいです」

「美味しいもの……じゅるり　おっと涎が。」

「……でも今は、久しぶりにゆつくり寝たいよう」

「そうね、まずはゆつくり休んで、他の事はそれからね」

億年単位で考えたり、年単位で戦ったり、交渉したり……  
自分も本当に気が長くなっただ、そんなとりとめもないことを思いながら、

インとヨウを抱き寄せ、床に就いた。

### 3話：日常に混じってくる、要らんモノ達（改）（後書き）

なかなか書く内容が思い浮かばず、結局再び邪神に来てもらいました  
恐竜すらまだ出てこない時代・・・ネタに困って

開始時期を昔にしすぎたか、と若干後悔しています（苦笑）

今後更新が遅くなることがありますが、見捨てないで  
えるとありがたいです

では、また次回

2011.07.23 改訂

一部の設定変更に伴い、加筆修正しました。  
無駄に増量してしまった設定関連の記述は、読み流してもらっても  
結構です。

改訂前よりも主人公を強化してしまったような……

#### 4話：食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）（前書き）

やっと、まともな生物の登場。

主人公達の食生活の行方やいかに！？

さあ、第4話の始まりです。

#### 4話：食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）

4話：食生活の充実と、邪神戦の置き土産

ようやく原作までおよそ9億年？ となった。

ここ最近はずかなもので、数千年近くもの間、邪神も来ず、暇神もちよつかいをかけてこないの、

のんびり修行や研究に勤しむことができている。

おかげで、やっと発生が確認された多細胞生物

まだまだ小さいものばかりだが、を材料に、

美味しいお肉作成に成功した……長かった、此処まで来るのに本当に永かった……

決め手は、アミノ酸がほぼ全て揃って、蛋白質の生成が容易になったことか。

おかげで、ジューシーな肉汁などの“美味しさの要因”を作り出すことに専念でき、

それによって噛み締めたときの食感も……

「……………ん~~~~っ！！ 久しぶりの、

ホンッ……………トに久しぶりのこの食感……堪らない」

「ムグムグ……ただ塩振って焼いただけのお肉が、こんなに美味しいなんて驚きです」

「ガツガツムシャムシャ……………主様、今まで味見を頑張実験台ってきて、ホントに良かったです」

焼肉を口に入れ、眼を瞑って味覚に集中する。

食欲をそそる匂い、硬過ぎず、それでいて噛み応えのあるお肉、噛む度に溢れる肉汁、旨味……

主に試作食材の味見を担当していたヨウは感動のあまり、ホロリと涙を零している。

一通り食べて満足したら、今後の相談。

「……次は野菜、かな？」

「そうですね。」

「あと、お酒も飲んでみたい！」

「お酒は糖を発酵、ってこの時代には酵母菌がないんだっただね……どうしようか」

「効果を代用できる術式を組んで、魔力で代行するしかないかと」

「やっぱりそうなるのね……」

「主様、ファイトです！」

砂糖は出来ているから簡単かと思っただが、全然そんなことは無かった。

結局、生のアルコールを生成して、お酒らしくするために、それらに香りや味といった風味を付けていく。

他の研究も並行して続けていたせいでもあるけど、満足のいく物ができるまで、数十万年もかかってしまった。

特に香りの素となる分子は、種類が多過ぎる上に構造が複雑過ぎる。

それに、構造がほんの一部が変わるだけでまったく別の香りに、混ぜ合わせれば、更に別の香りに……とキリが無い。

似たようなものをチマチマ作っていくのは、正直言って面倒臭かった。

……副産物として、香辛料がたつぷり出来たのは嬉しい誤算だったけど。

花の香りっぱいものも造れたので、

一応、この身体も女の子な訳だし、と香水も造ってみた。

今のところ必要性は皆無なのだけど……他人どころかまともな動物すら存在しないし。

原作まで6億年くらい？

大規模な氷河期も収まり、  
スノーボールアース

まだまだ地上は静かだが、海中の生物の種類が大分増えてきた。

三葉虫は大抵の海で獲れるようになり、

カンブリア紀特有のよく分らん生物もたくさん出現した。

有名どころでは棘々としたハルケギニアや、海老みたいなアノマロカリスなど……

これで節足動物ばかりだが、本物の肉を食べるようになった。

三葉虫を試しに焼いて食ってみたが、淡泊な味で中々悪くなかった。植物の方は藻類しか居ないので、海苔モドキにするぐらいしかない。

……植物の地上進出が待ち遠しい。

原作までだいたい2億年、のはず……

やっと恐竜出現。ここまで本当に永かった。

植物の地上進出、昆虫の発生、大規模な氷期や生物の大量絶滅……それらを乗り越えての生命の進化には圧倒される。

ついでに、この世界独自の進化も起こってしまった。

なんというか、邪神との戦いをちよいちよいやっていたせいで、戦場跡に残っていた魔術の残滓や、残留呪力などの汚染？ によって、

魔力を進化の糧にした生物が出現してしまった。

鼻先の角から雷を放つ草食恐竜とか、炎を吐く肉食恐竜とか……ナンテコッタ

私のチートスキルのおかげですぐに懐くのは構わない、構わないんだが……

じゃれ合いのつもりなのか、風を纏って突進されたり、

炎を鼻から吹き出しながら顔を擦り付けられるのは……ちよつと遠慮したい。

大抵の攻撃？ は受け流せるものとはいえ、

癒しとなるはずだった動物達との交流で、かえって気が休まらないということに……

戦闘の後始末をしていなかった自分のせいとはいえ、ちよつと泣きたい。グスン。

インは静かな方が落ち着くのか、あまり自分から森の方へ行こうとしないが、

ヨウは良い遊び相手が出来た、とばかりに毎日のように恐竜の住処へ突撃している。

時には仏頂面のインを引き摺っていくこともあり、苦笑してしまう。

いろいろと研究を重ねて、天然建材を用いた建築技術なんてのも習得。

他にも楽器とか、食器、家具なんかも木を削ったり、金属を鋳溶かしたりして作成。

超がつく古代に暮らしているのに、中世より若干上等なレベルの生活をしている。

それに、天然食材もたっぷり採れるので、料理が美味しくて堪らない。

まともな物を食べることが出来なかった数十億年のことを思うと、多少の失敗料理など可愛いものだ……うん、なんかホントに涙が出てきた。

まあ、そんなわけで、食事時のテーブルは小さな戦場といった感じだ。

「あー、ずるいつ！ それ私が狙ってたのに！」

「フツ……早い者勝ちです」

「じゃあ、これ貰い！」

「っ！…くうつ……ならば、これは私が頂きます」

「はいはい、もうちょっと静かに食べなさい」

あんまり騒がしいと注意するけど……なんだか、母親になったような気分。

確かに、私がああ娘達を育てたようなものだけど、ちょっと複雑な気分。

そう思いながら、木の实から造った酒を呷った。

原作まで1億年？

恐竜の全盛期。

二足歩行、四足歩行の恐竜に加え、翼竜や首長竜など様々な種が生まれ、

それらの中で、更に魔力を取り込んだ種が……と、かなり力オスな世界になった。

……なつてしまった。

海水を操って翼竜を撃ち落とす首長竜がいるかと思えば、風を操ってティラノサウルスを群で狩る翼竜も居るのだ。

いやもう、前世の世界の学者が見たら腰を抜かしかねない。

そんな中、自分たちが何をしているかというと、

魔力を得た竜の中でも上位の能力を持つ種を選んで、

乗騎として仕込んでみようと挑戦中。

騎乗者の命令を伝える術式や、

乗騎を落ち着かせる術式を編みこんだ手綱や鞍を作成したり、

乗騎として育てやすく、扱いやすい性質になるように、馬と同様に品種改良したり。

まあ、遺伝子をいじるとか、生物実験ちつくなことはしていないけど……

何が起こるかかわからないし、バクテリアと違い、生命力も高い竜の相手は面倒くさそう。

それに、邪神相手に鍛えた戦闘能力は、手加減が難しく、

まだまだ未熟なこの星の生命相手だと過剰すぎて、

周りへの被害が半端ないことになりそうで……

そういうことで、良い感じの牡と牝をかけ合わせたり、育て方を工夫したり、いろいろやってみた。

最終的に、物語に出てくる翼ある竜<sup>リンドブルム</sup>みたいな感じになった。

幼いころは全身柔らかな羽毛に包まれていて、成長するに従って、手足や鼻先、目元の辺り等が鱗へと生え変わっていく。

体を覆う羽毛も、幼竜の頃のものから生え変わって、衝撃吸収、耐刃性のある頑丈なものに……

幼竜のものと比べると、少しゴワゴワした感じではあるが、それでもまだ撫でて気持ちがいい毛質。

慣れた竜に鞍無しで跨ると、ふかふかとクッションの効いた背中へ乗り心地抜群。

老いてくると、羽毛が抜けて鱗に覆われている部位が増えてくるのだが……

老人の禿頭を連想してしまうな。

あと、個体によって吐くブレスの種類が違う。珍しい奴では毒のブレス、石化のブレスとか。

寿命が無いも同然の私達と違い、数十年で死んでしまう……

懐いていた子が死んでしまうと、やはり悲しい。

けど、世代を重ねることに少しずつ寿命を延ばし、

知恵を付けてきて、言葉は喋れないながらもコミュニケーション能力を発達させ、

百代目くらい？ から、半ば奉仕種族みたいに……あれ？

私ってどっかの邪神の類だったわけ？

ちなみに、ヨウはノリノリで命令を下したり、変な儀式を教えたりしている。

……後からちゃんと修正してるけど。

インも仕事を手伝わせたり、作業しているところを覗いて、ちゃっかり自分の分も作らせたりと、何気に活用？ している。

「さあ、唱えるの！ いあいあ……」

「やめんかつー！！」

スパーーーンッ！

今日も森にハリセンの音が響く。

原作まで約6500万年、かな？

恐竜の絶滅。

巨大隕石の落下は久しぶりだったし、

他に生命の居ない時期のものしか知らなかったから、

隕石落下が生物にどれほどの影響を与えるのか、実感させられた。

隕石の着地点の周辺は衝撃波と熱波に薙ぎ払われた。

また、その他の地域も、巻き上げられた粉塵に覆われ、

降り注ぐ日光の減少による急速な寒冷化によって、

殆どの生物が飢えと寒さに死んでいった。

このまま何もせず、滅びを見届けるべきなのだろうか、迷う。

この絶滅を回避させたとして、今後も絶滅の危機の度に何か対処するの？

そうした場合、哺乳類の発達とヒトの歴史は？

今後、恐竜の危機を見過ごすなら、結局見捨てるのと結果は同じでは？

いろいろと考えた結果、もう自分のやりたいようにすることにした。無駄に力を持ってしまっている時点で、

本来の歴史を意図せずして変えてしまうことも、充分にあり得る。既に生命の進化の系統樹だって、本来のものとは大きくかけ離れてしまっている。

だから、何があっても受け入れる覚悟で、自分の望むままに行動する、そう決めた。

絶滅させるには惜しい種

恐竜の進化における、現時点での各頂点に位置する種族 を  
選ぶ、

一部の個体を儀式魔術で、生息していた土地に凍結封印した他は、そのまま滅びを見届けた。

封印・保護した理由は、ここで絶滅しなかった場合、進化の果てにどのようなカタチを得るのが気になったから、というもの。

いつか、彼らを開放できるような、広大な隔離空間を創らないとね。

まあ、いくら自身に力があると言っても、個人でやれることには限りがあるわけだし……

大筋の世界の流れを積極的に変えるつもりはないが、

親しい人が巻き込まれた時など、自分で動くとした場合はたぶん、躊躇することはないだろうな……

ちなみに我が奉仕種族（笑）は魔術を駆使し、

また数が少なかったこともあり、餓えることなく自力で生き延びました。

他にも、魔力を取り込んだ種や、羽毛を発達させた後の鳥類に繋が

る種、

哺乳類の祖先なども無事に生き延びた。

騒動がひと段落ついた後、

隕石の衝撃波で吹き飛んでしまった我が家をどうするか、

また、隕石の影響での寒冷化にどう対処するか、皆で話し合った結果、

地盤のしっかりした土地を選んで、地下に住居を作ることにした。

ただ、暖かそうだから、と火山近くを掘ろうとしたのは失敗だった

……

いや、魔術で壁を強化したり、冷却呪紋を彫ったりと工夫してみたが、

流石に溶岩は無理。

自分たちは無事でも、家財道具が全滅してしまう。

そんな訳で、火山からある程度離れた土地の地下に新居を構えた。

温泉を引いて、床暖房もどきも設置。

又クヌクと引きこもり生活を堪能した……いや、ちゃんと鍛錬は続けていますよ？

だって、他の転生者と敵対した場合、

ケチヨンケチヨンにされるなんてのは遠慮したいし。

ただ、自分は思っていたよりも研究者気質だったらしく、

食の研究、便利な魔道具の開発など……

術式の開発や体捌きの改良も含め、のめりこむとなかなか止まらず、頑丈な身体に任せて、数週間徹夜で研究漬けな日々を送ったことも

……

狩りや家事はヨウに任せて、インと一緒に実験を繰り返す日々。

「二人とも、あの頃は眼が怖かった。ホントに危ない人みたいだった

た」

とは、数世紀後のヨウの言葉。

原作開始まで2500万年くらい？

二足歩行する猿の登場。

まだ前かがみで、四足歩行に近いけど、

もうすぐ人に会える……………ここに至るまで、本当に永かった！！

それでは、コミュニケーションに挑戦！

我が奉仕種族　とりあえず、竜種と命名。

他の恐竜から進化した種族は殆ど滅んでしまった　とも、

魔術の応用による念話や鳴き声を用いて、今までも会話？　出来て

いたけど、

なんていうか、敬われている感じがして、遠慮なく話せるのはインとヨウだけ…………

私のことを知らない相手なら、フランクに喋れるかも？

そう思っただけ試みたのだが、まず種族が違うことから、あっさり群から追い払われた。

敵対するわけにいかないから、反撃できないし…………

一方的に勝ち鬨を上げられると、自分のやっていることの虚しさを感じて…………

ちよつと泣きたい。

群の上位に居る個体の中には、簡単な魔力運用する奴までいて、

他の個体の投石に混じって、魔弾が飛んできたりする…………

チートスキルの“魅力（弱）”はどうした！？　と思っただけ、間の悪いことに繁殖期だった。

群れの中でもピリピリしているところに、他の種が近づいたら、そりゃ攻撃されるわ。

ということで、時期を改めて群と接触。鳴き声を分析してみた。会話の中身は単純だった。食べ物、敵、近寄るな、出発、休憩など、基本的に単語のぶつ切り。

まだ知性が十分に発達していないから仕方がない、か。  
あまり接触しすぎると、第二の奉仕種族に成りかねないし。

……現に今も、ヨウがノリノリで群のボスを下して、  
身振り手振りを交えつつ命令している。

インもちやつかり自分に果物を運ばせている……  
式神なのにフリーダム過ぎる。いや、そう育てたのは私だけど。  
とりあえず、

「イン！ ヨウ！ バカやってないで、とつとと帰るわよ！」

「……はい、主様」

「え〜、面白くなってきたのに……」

「友人作りに来ておいて、奉仕種族を増やしてどうするのよ……まったく」

原作20万年前？

ホモ・サピエンスと思しきヒトの出現を確認。

群も大きくなり、狩りのやり方、木の実の採集などの行動も、過去の原人、旧人に比べて、複雑になってきた。

まだまだ、衣服もきちんとしたものではなく、道具も石と木で出来たものが殆ど。

でも、やっとヒトが、ヒトと話せる……………と、思ったが、ちよいとタイム。

今までの猿人、原人などには通用していたけど、

今のヒト相手に“魅力（弱）”はどのくらい効くのだろうか？

効果が薄いのであれば、ちゃんと接触パターンを考えておかないと、下手なやり方では第一印象が最悪に、なんてことや、

警戒されて群れに入れない可能性も……

いや、どうせ寿命の違いから、

しばらく過ごしたら離れなければいけない訳だし、思い切って突撃しても良いか？

ということで、思い切ってそのまま群に参入してみた。

結果を言えば、子供達にものすつごく懐かれた……

元引きこもりで、今も人間関係薄い奴にどうしろと！！？

あ、ちよつと、髪引つ張らないで！ それ取っちゃダメ！！

親は若干警戒していたみたいけど、

子供相手にあわあわしている様を見て笑っていたから、たぶん大丈夫

別の群？ 集落？ からはぐれた、という設定で式神sとは姉妹つてことに。

ちなみに名前は、インとヨウはそのまま、私はソウにした。

由来は……音の響きが良いから、黒と白イン ヨウの間の色として、自分の色として蒼をイメージしたから。

あと、（発音的には）現実的に在りそうな感じがするから、かな。

まだ人間関係も単純で、言葉も未発達といえるんだろうけど、素朴な世界で癒された。

いずれ此処を離れなければいけないことを考えると、寂しい……

居る間だけでも、と子供らに石蹴りなんかの簡単な遊びを教えたり、娘衆と一緒に蔓を編んで鞆を作ったり、

長（髭モジャのおっさん）に気に入られて、

息子の嫁にならんか？ と誘われたり……

成長しない外見を幻術・魔術でごまかして、十数年過ごした。

これ以上長く居ると、離れられなくなりそうな気がして、

魔術での記憶操作や催眠術を駆使して、

自分達の存在を一時の夢だったかのように認識させてから、集落を離れた。

「皆……さよなら」

「……主様、私たちはずっと一緒です」

「そうです、主様は一人なんかじゃありません」

「うん……………ありがとう」

この時代に見合わない、過剰な力を持つ私たち……

頼られ、崇められるだけの関係を避けたいなら、関わり方を慎重に考えなければならない。

まだまだ未発達な彼らの自主性、自立性を奪いかねない。

実際に竜種を奉仕種族にしてしまったのだから、今後は注意していないと……

それに、対処を一步間違えれば、恐れられ、厭われることになって、後々の処理が面倒なことになる。

広範囲型の認識操作は、効力の調整が難しいのだ。

低出力だと魔力耐性が高い人への効きが悪いし、高耐性の人に合わせると、無関係な記憶まで吹っ飛ばされる人が大量に現れかねない。

ヒトの理性や社会性が発達するまで、長期に渡って関わることは無いのだろう。

そう思うと、やはり寂しい。

普通の人間を友に持つことが出来るようになるのは、いつになるのだろうか……

原作前3万年くらい？

好き勝手にあっちこっち動きつつ、

たまに人の集落に混じる生活を続けて、はや十数万年。

北アメリカの方で、久しぶりの邪神戦でクレーターを造ったり、

ヨーロッパの辺りでは、洞窟にみんなして絵を描いたり、と気ままに過ごした。

民族大移動？　みたいなのでは、中々気の良い連中だったから、現地の人を装って薬草の知識とか、食べれる野草について教えてあげたこともあった。

数百年ぶりに同じ集落を訪れると、認識を薄めているとはいえ、覚えている人が何人かいたらしく、父祖から伝え聞かされた伝説のお方、

白と黒の童を連れた賢者様、と崇められた……　オーマイガッ！

信仰されるのはゴメンなので、集落を離れるときは、もちろん念入りに記憶を消しました。

はいそこっ、「……勿体無い」とか言わない！

第一、信仰されすぎて、身動き取れなくなったらどうするの。

竜種の方は、既に寿命が数百〜千年クラスになっているので、信仰は薄れることなく、相変わらず崇められている。

……こっちはもう諦めた。術をかけるとしても魔力耐性、精神力、共に高レベルだし。

基本的に争いを好まない性格なので、必要最低限の狩りを除いて、人や他の動物を避けて、山奥の峡谷に隠れ住んでいる。

長寿なためか、生まれる仔が少なく、成長もゆっくりとしたもの。偶に隠れ里を訪れると大いに歓迎される。

なんか仔犬が尻尾を振って駆け寄ってくる感じ……図体は大きいけど。

幼竜なんて、信仰してくる成竜と違い、無邪気に懐いてくれて、ホントにもう、可愛いっ！！

成長するにつれて、私「カミサマ、という風に刷り込まれていくけど……orz

だから、仔（卵）が生まれたら連絡してもらうことにしている。

卵から孵ったばかりの仔竜の可愛さといったら………

語彙力のない自分が恨めしくなるくらい。

親の方も、名付け親になってくれ、と言ってくれるもんだから、

……無い頭を振り絞って、嘗ての自分の知識から、良い意味の言葉、響きの良い言葉を引っ張ってきて、命名している。

おかげで、竜種の隠れ里は日本人めいた名前が飛び交っている……教え込んだ言語も日本語だし。

見た目が西洋の竜に近い（ノッポ気味の、東洋の竜みたいな胴長の個体も居る）

のに台無し、かもしれない？

そんな感じで、最近（ここ数億年くらい？）生まれた仔らは、もう自分の子、孫みたいな気分

流石に此処まで来ると、見捨てることも出来ないから、

何かあつたらこつちに知らせが入るように、通信術式を組んでいる。

（ソウ様……どうか、うちの仔にも名付けてやってください）

「うん……じゃあ……マチコ、真を知る子、真知子。

困難にあつても挫けずに、自分の道を選ぶように……お前の生に幸多からんことを」

えー、もっとカッコイイ名前にしようよ、とかほざく声が聞こえたが、

DQNネーム反対、名前は一生ついて回るもの、堅実なもので良いの！

マンガとか、二次創作とは違うんです。

……あれ？ よく考えたら、

今の自分は創作（に良く似た）世界の住人だった……ま、いつか。

原作まで大体1万年、だと思う。

久しぶりの氷期も終わり、

世界地図も自分の知っていたものとあまり変わらない姿になった。

犬を飼う集落も増え、また、狩猟から農耕に切り替えるところも出てきた。

人の住まう領域も大分増え、自然界の存在を神として崇めたり、託宣を受けようとしたり、色々と地域ごとに特色も出てきている。

魔力を運用できる人が巫女として選ばれ、  
精霊と交感して簡単な天候予測や占いをしたり、  
神事を取り仕切ったり、

……もちろん私が集落に潜り込む時は、そんなことに巻き込まれないように、

魔力が無いと誤認されるよう、神職さんの感覚を騙している。

が、何故か白黒の童を連れた賢者の伝承があちこちに残っている。  
いや、確かに気に入った連中には、歴史を変えない、

発展させすぎない程度に色々教えたりしたけど、

インとヨウの髪の色を幻術で変えたり、離れる時に念入りに記憶や  
認識を弄ったりして、

ちゃんと？ 誤魔化しているのに……

ちなみに、この世界の住人の髪、瞳の色は赤や青、緑等も存在する  
ので結構カラフル。

透き通るような紅の髪の娘とか、

深い翡翠の色をした髪の子とかも稀に現れるけど、とっても綺麗。

駄神が何か余計なことをしているんじゃないだろうな……今度問い  
詰めてみるか？

それとも、感覚・認識に特化した能力を秘めた人でも居たのだろう  
か？

まあ、民間伝承程度なら、後に宗教が発展すれば薄れるだろう、  
というか薄れてくれ……お願い……

それから、世界各地で妙な感じの空間、フィールドというか、場の様なものを  
確認した。

何なのだろうか、これは……

どっかの異世界と繋がっているとか、そんなことは無い、よな？  
……………あれ、もしかしてこれってフラグ？

原作まで5千年くらい？ 紀元前3千年前後。

side 暇神

エジプト、メソポタミア等で文明の大きな発達を確認……  
やっと人類の記録に残る“歴史”の始まり。本格的な“物語”  
の始まり。

長かった……本当に、ほんとうに……永かった。

さあ、楽しませてくれよ？ ソウ、そして他の転生者の諸君。  
フフフフフ、フハハハハハハハッ、アーッハッハッハッハ  
ッハッハ……

#### 4 話：食生活の充実と、邪神戦の置き土産（改）（後書き）

やっと、ようやくと人の文明に至りました

主人公の名前が出るまで、そして人と、文明？ と接触するまで  
プロローグ含めて4話も掛けてしまった……ここまで、作者としても長かったです

主人公の冒険はこれから本格的に始まるのです  
他の転生者諸君の出番ももうすぐ……

今後の展開にご期待……いえ、あまり期待しないで待っていてください  
なにぶん、文才の無い作者ですので

では、また次回

2010・10・08 内容を若干修正しました

2011・07・31 改訂

一部設定の変更に伴い、加筆修正しました。

改定前では上手く纏められていなかった内容も、改めて追加しました。

以降の展開で徐々に違いが出てくる……はず、です……

**5話・魔改造、どうせやるなら、徹底的に（改）（前書き）**

原作まではまだまだ遠いですが、  
ようやく新キャラ登場！

それでは5話の開幕です。

## 5話：魔改造、どうせやるなら、徹底的に（改）

5話：魔改造、どうせやるなら、徹底的に

原作まで5千年くらい？ 紀元前3千年前後。

エジプトやら、メソポタミアやら覗いてみた。

村から街へと発展しつつあり、交易の拠点となっているだけあって可愛い娘も多く、

裏町を覗いてイケナイコトをしたことも……

億年単位でインやヨウと鍛えたテクをなめないで？

ふふふふ、ここか？ ここがええのんかあゝゝ？

ハッ、ちょっと危ない方向へ意識が飛んでいた気がする。

人が多い分、街に潜り込んでもそれほど怪しまれず、結構長居してしまっただけ。

まあ、余所はまだ発展していないだろうから、移っても見るものは少なそうだけど。

それに、こういった文明が発達し始める土地は、

人が住みやすい土地だというだけでなく、

異世界からの来訪者達の影響の強い場でもあつたらしい。  
カミガミ  
フイールド

大きな街のある土地は、以前に妙な感じの場を感知した所で、

やはりというか、何というか……異界との繋がりが強い場だったらしく、

カミガミが干渉するための『門』の機能を持つ神殿等が建てられている。

連中がこつちにちよっかい出しに來た経緯は、

なんか変な空間見つけ      どうやら余所の世界と繋がっているみたい

面白そうだから遊びに行こう      異世界交流開始

という流れらしい。

ただ、彼らはあくまで、  
異世界も含めての『この世界』『この次元』に存在する一種族としての『神』であり、

『この世界』よりも高位に位置する、『創造神』とでもいうべき暇<sup>ひま</sup>神<sup>じん</sup>とは異なる。

只人よりも遥かに高い能力を持っているのは確かだが、  
奇跡みたいな神様染みた能力を使える者はほとんど居ない。

居たとしても、厳しい制限に縛られ、滅多に使えるものではないらしい。

そんなこんなで、街の神殿に遊びに行くと、いろんなカミと交流できる。

この感じだと、悪魔の類も居るんだろうな。どんな連中なのかな？

メソポタミアで知り合ったティアマト、アプスー夫妻とその子供達  
+      ……

バビロニア神話でも伝えられる、人よりもずっと高い能力を持つ彼らとの交流では、

能力の加減を気にする必要が無く、気楽に付き合つことができ、ホ

ントに楽しかった。

邪神達と違って、コミュニケーションも楽だったし……

工芸の神のムンムに、小物作りのコツを教えてもらったり、

天の神アヌから星・空について学んだり、

水に関わるカミが多いことから、いろいろと便利な水の使い方を教わったり、

女に見境のないエアに口説かれ、あまりのしつこさに叩きのめしてしまったり……

「ソーウちゃん、俺と一緒にいいことしな（ゴガッ！）

「……いい加減、しつこいっ！！ 女口説く他にやることは無いの！？」

「俺が何故口説くのかって？……それは、そこに美女が居るからさ！！」（キリッ）

堂々とあんなこと言われると、しかも無駄に爽やかな笑顔で……イラッとするわね。

ただ、ここまでされると、いっそ清々しいというか……もう、なんか吹っ切れた気分

「……よし、これだけでも分かってもらえないんだから、もっと激しいのカマしても全然問題ないよね イン、ヨウ、おいで」

「「はい」」

「……ちよつと待って。そんな物騒な物を、どーして俺に笑顔で向

けているの？」

「聞き分けのない、ウザい奴に向かって、  
思いつきりぶちかましたら、スッキリするかな？　と思つてね」

「いや、待つて、それはマジで洒落にならアツーーーー！！！！」

それにしても、カミつてやつは性に奔放すぎる。

兄弟姉妹であつても子供作っちゃうし、娘でも息子でもくっ付いちやうし……

エアなんて孫娘、曾孫でもOKとか……マジで死ねばいいのに（ボソリ）

私の式神sにまで手を出そうとしやがつて……

しかも権力？　上昇志向が強くて、親に喧嘩売つてばかりだし。

いやまあ、私も可愛かつたり綺麗な女神幾柱かと関係持ったことはあるけど、

あくまで普通に？　恋愛？　しての結果であつて、

無理やり迫るなんてことはしたことはないし……

え、五十歩百歩？　またまたご冗談を、あははははは……

そういえば、親子喧嘩に巻き込まれたときは、久しぶりに死ぬかと思つた。

どうやら、カミのこちらでの身体は、いわば仮想体であり、  
例え死んだとしても、向こう側の本体がどうにかなるわけではない  
そうだ。

ただし、仮想体<sup>アバター</sup>を失つたカミはこちらに干渉出来なくなつてしまう。

それに加え、人の信仰、思いの大きさによって、こちらで振るえる力も変動してしまう。

これは、人の強い想念を利用して、仮想体<sup>アバター</sup>へ送れる力の総量を増加させているため

だ。

信仰を奪い合うのは、力を増強させ、こちらに関わりやすくするため。

潰し合うのは、競争相手を減らして自分の影響力を増すため。  
つまり、この世界における、主な力ミガミの争いというのは、  
こちらへの干渉権を賭けてのもの、らしい。

ということ、じゃれ合いの類を除いて、

本体に影響のないこちらでの戦いは、かなりガチでの殺し合いに……  
一応は、一般民衆を巻き込まないだけの分別はあるようだが、  
ある程度の能力がある私の場合は、近くに居ようと関係がないらしい。

一度文句を言いに行ったら、

自分でちゃんと対処できるのに何で文句を言われるのかと、不思議がられた。

………価値観の違いって、難しい。

そんな感じで、古代文明の中心都市を拠点に、

異界の力ミガミと交流しつつ、あちこちふらつく気ままな日々。

長江や黄河といった大河をクロールでわたってみたり、

見所ある竜種の少女（160歳くらい）を連れて、

というか乗っかって修行を付けつつ地球一周してみたこともあった。

あと、ピラミッド建造時に建材に勝手に秘密の呪紋を刻んだこともあったし、

警備役らしきミイラと鬼ごっこもやった。

ちなみに、刻んだ呪紋の効果は土地の地力の底上げ。

これで無茶な耕作・伐採等をしない限り、正史と比べて多少砂漠化が抑えられるはず。

そうそう、この世界のピラミッドには、

やはりと言つべきか、建造当初から呪術的な要素を孕んでいた。

洪水期の公共事業みたいな感じで作られたこの施設に備えられたのは、

周囲の土地を肥沃にするように、周辺の魔素を集め、土地に還元させる機能。

私が刻んだ呪紋と合わせて、食うものに困ることは無さそうだな、この辺りは。

他には、カミガミへの祈りを集束させ、神殿を強化する機能なども

……

あまりに物騒なものは無効化したけど。

儀式のために周囲から生命力をかき集める仕組みとか、

信仰を強制する、いわば洗脳術式とでもいふべきものとか。

そのほかにしたことといえば、

対邪神戦等では鍛え辛い、対人戦闘の修練。

同族を傷つけ、殺すことに対する精神こころの切り替え方、

今の自分の能力でできる適切な無力化方法、

魔力・気の感知や分析、隠蔽能力、

そして、ヒトと獣、それ以外の気配を読み分ける技法等を編み出していった。

また、戦場で自身の能力を封じ、生き延びるために泥水を啜らなければならぬ、

そんな極限状況まで自分を追い込み、生き延びる手段を実際に体験もしてみた。

地形の利用、死体に紛れること、原始的ながら基本的な応急手当、  
e t c ……

それから、新技の実験で地形を変えてしまったり、滅びかけの集落を救ったり、そんなことを続けながら数世紀過ごした。

そうこうしている内に、久しぶりに大きな出来事に巻き込まれた。中国で気的能力を応用、発展させた仙術を操る、仙人集団の歴史への干渉……

封神演義の始まりである。

いや、この時代が殷周易姓革命の頃だとは思ってなくて、気紛れで道具の改良を手伝っていた相手が、まさか仙人達だったとは……いつも渾名で呼んでいて、名前をちゃんと覚えてなかったからね……ちよつと反省。

しかも、それに気付いたのが人造人間の作成で、名前が？？<sup>ナタ</sup>だったから……不覚。

でもそのおかげで、この世界が封神演義（藤崎作の漫画版）ではないことが判明。

藤崎版の女？との対決とか、マジで遠慮したい。

あの鬼火力に、魂魄の分裂による無限増殖、

魂魄時は通常攻撃無効……無理ゲー過ぎる。

いやー、ホント戦わずに済んで良かった良かった

それにしても、この<sup>ナタ</sup>??、妙に性能が高すぎる気がする。

いや、私も手を加えているから、性能が良いのは当然なんだけど、想定の数倍を超えるスペックっておかしすぎる。

なんか、部外者の私を妙に警戒してるみたいだし………いったい  
どうということ?

まっさか、ね………こんな早くに?

side:??<sup>ナタ</sup>?

眼が覚めたとき、俺は複数の人に取り囲まれていた。

この生において、俺は竜王の怒りを買ひ、母のために自害したのは  
覚えている。

自分の名前、家族構成、周囲の状況などから、恐らく封神演義の時  
代で、

自分は漫画では人造人間だった?<sup>ナタ</sup>なのだろうと理解はしていた。

ならば、後々復活はできるはずだし、生まれが異常だったらしい自  
分にも、

分け隔てなく愛情を注いでくれた母に迷惑はかけたくなかったから、  
特に躊躇うこともなく自分の身を裂いて、死んだ……はず。

ということとは、現在は太乙真人に蓮の化身として復活させられたと  
ころか?

でも、どう見ても他所の人間っぽい三人組　白衣に眼鏡の蒼髪少  
女と、

その妹分っぽい黒髪と白髪の双子?　らしい幼女　が、

太乙真人?　と思しき男と一緒に話して居る。

…… いったいどういうことだ？

ここは封神演義の時代、若しくは世界じゃないのか？

あ…… えと、まさか、他の…… 転生、者…… か？

いや、まあ、こっちの中身がばれなければ心配ないだろう…… たぶん。

読心術等を取得している奴なんてそうそう居ないだろうし、  
もしばれたとしても、誰彼構わず敵対するつもりもない。

話に分かる相手なのかもしれないのだし……

side end

とりあえず、思い切って聞いてみることにした。

どうせスペックがバカ高いと言っても、生まれたばかり。

チートの類があっても、すぐには使いこなせないだろう…… 油断するつもりはないし。

それに、此処には私の知り合いがたくさん居る。

やっこさんが暴走したということにすれば、

太乙の馬鹿のせいということ、すぐに協力も得られるだろう。

自己研鑽の塊みたいな仙人の中には、戦闘技能を高めている奴も居て、

そういった連中の戦闘力はバカに出来ない。

それに加えて、自分の能力を試したいという欲求も強い。

彼らに声を掛けたら一発だろう。そして、皆でフルボッコに……

うん、「戦いは数だよ、兄貴」ってやつだね。

「というわけで、私の質問に、はい、か、イエス、'でお答えください」

「……………それって、もう確信しているんじゃないのか？　ア  
ンタは」

「うーん、まあ、7、8割くらいであたりだと思ってるよ。

いくらなんでも、出力、身体の耐久力、気、などなど、

どれも想定されているものの数倍、酷いものでは十倍近い数値をた  
たき出している。

……更にまだ伸びる気配もあるし。

いくら私というイレギュラーが関与したとしても、この結果はおか  
しすぎる。

ということで、改めて聞くけど、あなたは一度死んで、  
自称神様に会ったことがあるよね」

「……………ああ」

「それで、あなたは何を望む？　ちなみに私は……何がしたいんだ  
ろう？

あまり自分の未練とかについて、考えたことはなかったわね。

……そもそもあの神に問答無用！　で転生を選ばされたようなも  
んだし。

うー………とりあえず、原作も分からないし、後味悪い思い  
をしない程度に、

自分のやりたいことを貫ければ、それで良いって感じかな？

要らんちよっかいかけて来ないなら、こっちの目的とかち合わない  
なら、

何してくれたって構わないんだけど」

ピンツ　と空気が張り詰め。

そんな中、転生者の無表情な少年が問い掛けてくる。

「……………それで、敵対するって言ったら……………どうする？」

「叩き潰すよ」

即答した。

私は全てを背負いきれるなんて思ってないし、敵対した相手に手加減できるほど、経験を積んでいるわけでもない。特に、この世界の人間に比べ、突出した能力を有するはずの転生者相手なら尚更。

自己中心的と言われようと、まずは自分の身を守って、それから他人を助ける。

自分の身も守れない奴が、他人を庇いきれるわけがない……………共倒れになるだけだ。

それに、身内ならともかく、敵対している相手まで助けようと思うほど、

私はお人好しではない……………どこその漫画の主人公じゃあるまいし。

「……………自分の目標はまだハッキリしない、‘これだ’と断言できない。

ただ、アンタとは敵対する可能性は低そうだ……………

けれど、自分が先輩相手にどの程度戦えるものなのか、

見極めるためにも、一戦、お相手願いたい」

なんていうか、素直な熱血系みたいだ。

こういう子って、どう相手すればいいんだろう？

嘗ての知り合いには一人も居なかったタイプ……………

ちなみに、こっちに来てからの知り合いでも熱血系は少なかった。

こういうタイプって、相手するまでしつこそうな気がする。

暑苦しく迫ってきて、とか……偏見かもしれないけど。

「あんまり手の内見せたくないんだけどな……はあ」

「それは、了承してもらえたとみて良いのか？」

「あー、うん……断つても付きまたってきそうだし（ボソッ）」

「ありがたい」

無表情ながら、どこか嬉しそうだ……もしかして、バトルジャンキー？

「とりあえず、場所を用意するから。」

こんな実験器具や工作道具が置いてあるところで暴れたら、太乙が泣く」

「ああ、了解だ」

模擬戦のために用意したのは、

結構な高空に、浮遊する柱を足場として百本近く並べた空間。

ある程度の高低差を付けてあり、立体的な戦闘も可能。

一応結界で隔離してあるので、流れ弾の心配もない。

下手に地上でやりあうと、被害が馬鹿にならないために用意された鍛錬場だ。

人外レベルのぶつかり合いは、地上を耕し、山を均し、川や湖を蒸発させてしまう。

今回は、基礎能力を調べるために、双方無手で、気や魔術は最低限に。

私も素の自分がどれだけ戦えるか気になったので、インとヨウは纏わず、離れた場所で見学させている。

白衣を脱ぎ捨て、伊達眼鏡を放る。そして

「それじゃ、始めようか」

私のその言葉で模擬戦が開始された。

彼は一気に核の出力を高め、柱を蹴り碎いて加速、そのまま勢いに乗って、全力で殴りかかってきた予想していたよりも、出力の上昇が早い。体捌きは荒いけど、それを補って余りある力。

「あああああああ！！！」

ゴゴッ！！

かわした先で、<sup>ナタ</sup>??の拳が柱の一本を粉碎する。

魔眼を発動させ、相手の状態を解析してみると、現在の出力は想定の7倍、常人の30倍強つて所か……

生まれたばかりなのに、これは破格の戦闘能力。

おそらく、このまま力任せに戦ったとしても、

この世界の上々上の中位には入れるだろう。

……さすが、チートだ。

自分の場合、下手にガツチリ組み合ってしまうと、力負けしかねない。

素の自分の身体能力は、特にチート強化しているわけではない。

自身の意図と寸分違わず動作させることが出来るが、それだけだ。

気や魔力に依る強化や、改良を続けた治癒能力を除けば、

筋力、骨格強度といった出力・防御力は、

ちよつと鍛えただけの一般人クラスでしかないのだから。

（うつそだー。主様の場合、‘ちよつと’鍛えたってレベルじゃないよ）

（はい、‘かなり’でも足りません。確実に‘限界まで’か、それ以上……

敢えて表現するならば、‘異常に’鍛えています）

（だーっ！ もうっ、戦闘中のモノローグに茶々を入れるなーっ！！）

（（はーいっ））

まったく、返事だけは良いんだから……

ずっと三人だけだったとしても寂しくないように、

と結構イイ性格に育ててしまったから、しょうがないんだけど、ね。

こういう時にされると、ガクツと気が抜けおうああああ……！！

……あ、危なかった、まともに喰らってしまうところだった。

「っつと、はっ、よつと、てい」

柱の中をヒョイヒョイと跳び回りつつ、基本的に回避、

偶に攻撃してくる相手の腕を取って、合気の要領で柱に叩きつける。  
が、なかなか飲み込みが早く、

一度喰らった攻撃に対する反応がどんどん良くなっていく。

それに加えて、回復、というか再生？ 速度も半端無く、

一度はもろに頭を打ち付けてだらだら血を流していたのに、

瞬時に、とまではいかないまでも、あつという間に治っていく。

繰り返していると、打撃に対する耐性でもつけたのか、

殆どダメージを感じさせない動きで起き上がってくるようになった。

……なんていうか、チートを相手にする不毛さの一端を垣間見た気がする。

私はこいつを鍛えたいわけじゃないのになあ……シクシクシク。

「くっ………まともに相手する必要もないと、そう言いたいのかならば、本気を出させてみせる………」

はあああああああああああああああああ……！！！！」

「いやいやいやいや、そんな、手なんて抜いてないから。本気で相手してるよ？」

「いくぞっ！！！！！！」

だというのに、なんか無駄に勘違いして気合を入れている彼……

こっちの言葉なんて全然聞いてないみたい。

こっちは身体能力そんなに高くないし、

体術系での必殺技の類も持って無いから、こっやってずっと受け流しているのに……

それを、そんな手抜きみたいに考えられても………いったいどーしろと？

って、あ、なんか気がやばいレベルで拳に集中してる。

そのままこっちにきたー！ー！ー！？

「うおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！」

仕方が無いので、襲い来る拳を紙一重で掻い潜り、呼吸を合わせてすうっと相手の懐に入る。

それにしても、おそろしい威力……当たってないのに頬が裂けるとか、ないわー……

でもまあ、これで済み、のはず。

ちゃんと殴ることの出来ない、密着状態から背中の方にスルリと回り込む。

そのまま首に腕を掛けて、キュツと絞めた。

一秒、二秒、三秒……

しばらくバタバタ暴れていた 首の力だけでこっちが身体ごと振り回された が、

高い身体能力のために余計に酸素を必要とする身体なのだろう。あっさり絞め落とせた。

気絶した？？<sup>ナタ</sup>を担いだまま見学エリアに飛び移ると、インとヨウが飲み物と手ぬぐいを持って駆け寄ってくる。

「お疲れ様です、主様」

「お疲れー……ねえ主様、決まり手は絞め落とし？」

「相撲じゃないんだから、決まり手って……」

成長と共に、私との繋がりが強化されていていつているらしいこの娘達

は、

最近では勝手に人の思考を呼んだり、私の嘗ての記憶から、ちよくちよく要らん知識を引っ張って来たりするようになって来た。

こんなネットもパソコンも無い時代に、

2 ヤンのネタとか……今の時代の人は絶対ついていけないぞ。

此間なんて、「SUMOUを再現しよう！」なんて言い出して

……

地球への被害がヒドイことになりそうなので、すぐに却下しました  
が。

いや、まあ、私もアニメや漫画の武器を再現したりしてるから、  
あまり人の事は言えないんだけど。

## 閑話休題

「で、見ててどうだった？」

「うん、想定以上の出力が確認できたから、

暴走する可能性も考えていたけど、かなり安定しているね。

さて、これからの改造計画を上方修正しておかないと……ふふふふ  
ふふふ」

マッドサイエンティスト

太乙真人が危ない笑い方をしている。

まあ、気持ちは分らないでもない……魔改造って心が躍るよね

まあ、敵対する可能性が全く無いとは言い切れないから、

強化するとしても程々にしておくつもりではいるけど。

というか、どちらかと言えば、ガチ強化よりもネタギミックを仕込  
んでみたい。

ロケットパンチとかドリルとか、眼からビームとか……

「ロケットパンチは捨てがたいわね。あとドリル、ドリルは絶対に  
はずせないわ!」

「いえ、どうせなら変形機能を……完全可変機つてステキですよ  
ね戦車形態とか飛行機モードとか………はあ………」

「ああ、確かに変形は男の浪漫だ」

「どうせなら変形よりも、ピンチの時にやってくる支援メカとの合  
体機構!!」

合体してパワーアップするのがいい!」

ヨウもノリノリでアイデアを出してくるし、

インも冷静に見えて暴走気味みたいだ。なんかウツトリしてるし……  
太乙真人も大分おかしいことになっているが、それはもとの素  
質のせい。

きつと、私が色々ネタを教え込んでしまったせいではない………  
たぶん。

いや、巨大ロボットとかの話をしてみたら、物凄く食いついてきて、  
色々洗脳してしまった気がする……他の仙人たちも含めて。

ナタ  
???が気絶しているのをいいことに、この改良計画は、  
悪巧み  
ストップパーが居ないために、どんどんエスカレートしていった。

数カ月後

ナタ  
???は立派な改造人間になっていた。  
以下はそのスペック。

・チート能力（怪力・再生能力などが確認された。本人が黙っているので詳しくは不明）

・眼からビーム発射可能。

・魔改造風火輪<sup>ふうかりん</sup>で陸海空を結構自由に移動可能

・手首をドリルに変形可能。

・肘から先をロケットパンチとして飛ばせる（乾坤圈<sup>けんこんけん</sup>の機能を内蔵した）

・骨格を組み替えて、戦闘機や戦車に変形可能（戦車砲や装甲などは宝貝が変形して担当）

・支援メカ宝貝（ガン ムXのGファ コンみたいな奴）と合体可能。

変形時も合体可能。変身時は似合わないから、と合体できない設定に。

・内蔵武器として、肩口に収納されているビー サーベルや、胸部が開いて現れる大型荷電粒子砲。

腕部には火炎放射、ペンシルミサイルが格納されている。

・外見はぱつと見美少女の無表情気味少年。

若干長めの髪は赤毛で首の後ろで尻尾みたいに括っている。

・通常時はリミッターがついている状態で、解除すると正統派魔法少女（笑）に変身する。

変身時は核である霊珠（のダミー）が胸から顕れ、それが魔法少女の杖に変形？ する。

攻撃も、それらしいエフェクト（命中時や発射時に や の発光、鈴の音系の効果音等）

が入るように設定されている（改造に掛かった時間の8割が、これに費やされた）

ちなみに、本来の変身である三面八臂は「可愛くない」という理由で削除された。

この話を聞いた時の???は涙目だったそう。

改造手術が完了したその日。  
目覚めてスペックを聞いた？？<sup>ナタ</sup>の、

「うああああああああああああああああ！！！！」

という悲痛な叫びが、崑崙山中に響き渡った……

その後、その魔改造ボディを早速活用したらしい破壊の音と、  
太乙のものと思しき絶叫が木霊した。

……少々やりすぎた、かな？

その後、少し彼を慰める？ 宥める？ のを手伝ってから、崑崙山  
を離れた。

あれから数世紀……

大きな歴史の流れには手を出さないつもりだったけど、  
戦争に巻き込まれる無力な民衆を見捨てるのは、やっぱり後味が悪い。

ということ、出来る範囲で、圧政に苦しむ人々や、

避難先を求める者を安全な場所へ案内したり、

簡単な薬の作り方を伝えたり、効率の良い農業のやり方、

盗賊などから身を守る術を教えて回った。

あれ？ こんな事ばかりしているから、賢者伝説が広まるのか……  
まあ、いつか。

一応認識弄って印象を薄めているから、細かい特徴は広まってないし。

インとヨウも自身の变化能力に慣れてきて、  
童姿だけでなく狼や鷹の姿をとったりしているから、  
伝説の内容が地域ごとに微妙に違うものになった。

「白と黒の獣を連れた」とか「白黒の従者を連れた」とか、  
酷いものでは「白黒の竜を連れた蒼髪の賢人」……

私、人（一般人）前でそんな自重しない行動はさせたことないのに  
orz

……ただ、一度だけ、人前で攻撃魔術を振るったことがある。

一般人がまだ残っているにもかかわらず、

街中で鬭争をおっぱじめた魔術師達にプチ切れてしまって、  
思い切り叩きのめしてしまったのだ。

そのせいで「黒白の翼の御使い」なんて厨二くさい渾名も……マジ  
で嬉しくない

いや、結構長居して気に入っていた街で、永らく面倒を見ていた娘  
が巻き込まれたし、

うちの施療院を、その面する通りごと思いつきりぶっ壊していき、  
その上、被害者の目の前で更に鬭争を続けようとしやがったから……

裏の人間が、真昼間から一般人の前で、

堂々と魔術・呪術をふるって喧嘩なんてしてるんじゃない！

と、カッとなって、ついついやってしまったわけだが……

私の攻撃で大きな被害が出ずに済んで、ホントに幸いだった。

結局、その魔術鬭争はいったん双方とも後退して、別の場所で仕切  
りなおしになった。

その間に、近場に居た殆どの一般人が逃げ切れたから、結果的には  
良かったが……

あとで、インとヨウにはみっちり説教された。

「主様のお怒りはもつともですが、近くに民間人も居る状況で、そんな感情に任せてほいほい魔術を扱うべきではありません!! 私達は主様の命には基本的に逆らえないのですから、もつと自分を律してください!

もし加減をミスって何かあったら、長々と後悔することになるのは確実です!!」

確かに、私達チート持ち転生者は下手をすれば世界を数回? 滅ぼせる力があるのだから、

能力の制御、自己の管理をきちんとしないといけない、っていうのは分かっていたつもりだったけど……ちよつと甘かったあとは……自分同様、ヒト以上の力を持つ異界のカミガミとの交流で、

気が抜けていた、つてのもあるかもしれない。

いざとなったら止めてもらえるかも、そんな甘えを抱いてしまつて……

せつかく、分割思考が出来る身なのだから、

感情を抑えた思考を常駐させるぐらいしておくべきだった。

インとヨウがどんなに成長したとしても、

もとは式神でしかない以上、私の指示には逆らえない。

いつもお互いに悪ふざけをするような関係だったから、忘れがちだけれど……

私を止めることができるのは、今のところ私しか居ないのだと、猛省した。

知り合いのカミだつて、いつまでも此方に居るとは限らない。

アバター仮想体を失えばそれまでだし、

それ以前に、近くに居なければ止めようもない。

それから、揺れる感情の裏側に、  
分割思考を割いて作った冷静な、冷徹な自分を常に置くようになった。

様々な土地を渡り歩きながら思う。

だいが、人間の勢力が拡大して来ている。

そのせいで住処を追われる獣や植物も少しずつ増えてつつある。

人間の身勝手で滅びる種がこれからどんどん増えていくことになるだろう。

それはなんか勿体無いな、そう思って、

動植物達を避難させれる異界の作成に取り掛かることにした。

以前土地に封じた恐竜達も、いい加減に外に出してやりたいしね。

## 5話：魔改造、どうせやるなら、徹底的に（改）（後書き）

さて、少しずつですが、原作に近づいてきました。

??<sup>ナタ</sup>として誕生した転生者も登場しましたし、

いろいろカオスな世界になりそうです。

それにしても、封神演義は入れるつもり無かったんですが、

……行き当たりばったりってホント怖いですね、先行きが見えない  
辺り。

それから、??<sup>ナタ</sup>の魔改造のアイデアを募集します。

自分で現在思いつく限り詰め込みましたが、

まだまだ物足りないと思う人は感想等で意見をください。

次回以降の登場時に反映させます。

それでは、また次回。

2010・10・08 後半部分を若干修正しました。

2011・08・13 改訂

設定変更に伴い、加筆修正しました。

特に、異世界関連の設定を大幅に変更したので、六話の展開も大きく  
変える予定です。

6話：どーしてこうなったorz（前書き）

お久しぶりです。それから、お待たせしました  
ようやく、6話の投稿です

6話：どーしてこうなったorz

6話：どーしてこうなったorz

人払いの効果を持つモノ、内と外を分断するモノ、  
内側に外とは異なる法則を持ち込むモノ等、これまでに様々な結界  
を構築したことがあるが

外界と隔離された、それも恒常的なモノを創りあげるというのはか  
なり難しい

ネギまの魔法世界をイメージして、地球全域を覆うサイズの人造異  
界を目標に

地脈・霊域などから直接魔力素を取り込む方式を取り

要石として、みっちり術式を刻み込んだ石柱を打ち込む方法を考えた  
この方式の問題点は、要石が一定数以上喪われると、異界が維持で  
きなくなってしまうこと

誰かに発見されて破壊されたり、石自体が風化して

刻んだ呪紋が失われたりする可能性を考えると、定期的に点検、修  
復する必要がある

…… 今まで個人で活動してきたが、魔術師なんかの能力を持つ人間  
も増えてきたし

そろそろ仲間を増やしていった方が良いのかもしれない

仙人達も、地上の争いにちょっかい出すのを控えているみたいだか  
ら、皆退屈してるだろうし

声を掛ければノリノリで参加しそうな予感

百年くらい掛けて、能力の高い人材をこっそりと集め

とりあえず小さめ、とは言っても半径数十キロの異界を試しに構築

更に百年くらい掛けて、研究・開発系の仙人や魔術師達と

内部の環境パラメータを弄ったり、要石や地脈に掛かる負荷を調査したり、術式の穴を埋めたり

そんなこんなしているうちに、名前の無かった我が魔術？結社は

『完全なる世界』と呼ばれるようになっていた

あれ？　ここってネギまの世界？

結社が『完全なる世界』ってことは、私が『造物主』？

確かに、この世界の魔術（魔法）は精霊を介して発現させるものが殆どだし

結社は異界Ⅱ異なる『世界』を造り上げようとする魔術結社だからあながち間違った命名ではないのだが……どーしてこうなったorz

気付けば『完全なる世界』の盟主として祭り上げられており、私が凹んでいる間にも、

先代、先々代の意思を継いで結社に参加してくれた忠臣？達がやるべきことを進めてくれる

通常の魔術・呪術等の他に、仙人達との技術交流で仙術も取り込み、どんどん異界の改良が進んでいく

その上、技術畑の連中

特に初期メンバーの中でも変態級の幾人かは、仙術で寿命を延ばして未だに現役

更に、その後の世代も、なんというか凝り性な血を受け継いでいるらしく

斜め上方向に伸びる技術ばかり開発している

……なまじ腕が良く、何かしら使えるものを造っているから性質が悪い

いざとなったら、馬鹿共の嫁に連絡すれば良いんだけどね

「あんたあ！　またバカなことやってるんだって！！？」

「いや、これが完成すれば「それは他人さまに迷惑掛けてまですることなのかい！？」ひいいいっ」

いつの時代も、女（母）は強し

そうして出来上がった人造異界に、段階を踏みつつ

各地に封印していた古代の生命を解き放った

ついでに、足りない手を補うために生み出した擬似生命とでも言うべき、魔力で活動する存在を改良

魔法生命体として異界の土地を開放、開拓者として頑張ってもらっている

この魔法生命体が誕生する切っ掛け

それは研究者達が「猫耳娘サイコー！」だとかアホども

「悪魔っ娘は私の嫁です（キリッ）」とか言い出して……

いや、私が昔仙人達に教えた嘗ての燃え・萌え知識が、巡り巡ってこんな事になったから

大本の原因は私ってことになる訳で、ぶっちゃけ自業自得なんだけど

という訳で、生み出された魔法生命体は

あんな可愛い娘達（ついでに野郎共も）を、我々の勝手な事情で縛り付けるなんて

世界の宝《美少女》に対する冒瀆だ！　等といった主張により異界関連の仕事が一段落した後、通常人類と変わらない扱いで解放された

まあ、機密に関わるような作業・研究には関わらせていなかったから、というのも理由の一つであるのだが

ちなみに、この魔法生命体（通称：獣人・亜人族）は研究者の好み  
のせいで

美少女率が高く、基本的に男より女の方が強い

戦闘能力の簡易比較は

美少女・美女　＜少女・女性　＜幼女・男の娘・老女　＜越えられ  
ない壁　＜紳士　＜マツチヨ　＜青年　＜少年・爺

と、この様になる

以下は、これらに携わった研究者達の台詞を一部抜粋したものである

「小柄な美少女が、でっかい得物を振り回している姿を想像すると  
……も、萌える……！」

「女の子がマツチヨに負けることなど、あつてはならないんだ……！  
！」

「紳士が幼女に勝つことができようか、いや勝てる訳が無い……！」

「こんな可愛い娘が女の子な訳が……どがっぺきつぐしゃっごきんっ  
……【この研究者は修正されました】

「ふたなり盟主たん、はあはあ……ほぐっがっど……めきつぐしゃっ  
……【この研究sh（ry

その後、どうせネギまの世界なら、と

火星のほうにも人造異界を構築してみた

原作では、人造異界の寿命がどうのこうの、という話だったと思うが

こちらは『完全なる世界』の皆で、修理・点検・改良を続けていくことになっているから

たぶん、魔法世界崩壊の危機！ は起きないはず

地脈に打ち込んだ要石は定期的に術式を更新

各要石の更新はローテーションを組んで、常に八割以上稼動するよ  
うに

また、霊地に植えた魔法樹から、それに共生させている魔法菌を介して

異界維持のための術式を感染させていく仕組みも作っているので最終的に、異界内の植物が全滅しない限り、異界崩壊は発生しなくなるはず

完成した地球の人造異界を、ナイトウィードから『裏界』、火星の人造異界はそのまま『魔法界』と命名

『裏界』は爬虫類・甲殻類系の魔獣 進化の過程で魔力を取り込んだ生命体 が多く

その生態系のトップに位置するのは、我らが眷属たる竜種であるこの仔達は、独自の魔術を発展させて、ついに人と殆ど変わらぬ姿をとることも可能になった

勢いでついつい二つも異界を構築してしまつて

領土を求める国や実験・研究素材を求める組織なんかに狙われかねない『完全なる世界』は わたしたち

下手に人材を集めることができず、‘使えるものは親でも使え’つてぐらい人手不足なので

人型になった竜種に『裏界』の管理を任せて、主要人員は『魔法界』側の管理に専念することになった

『魔法界』の方は、『完全なる世界』の人員が移住することも考慮して

ユニコーンや不死鳥といった、人に狙われる希少性の高い魔獣に加

えて

騎獣等の生活の補助となる魔獣も連れて行った

そのため、爬虫類・甲殻類系の『裏界』に対して、『魔法界』は哺乳類・鳥類系の魔獣が多くなった

そのうち、魔女狩りにあつた魔術師達を避難させることになるかもしれないが

しばらくは身内だけで、ゆっくりじっくり環境を整えていこう

そういえば、そろそろイエスが誕生するのでは？　と思い出したので希代の宗教家？　がどんな奴なのか、顔を見に行こう

と、執務室に身代わりを残して、久しぶりに『魔法界』の『完全な世界』本部から脱走した

なんというか、組織のトップって書類仕事ばかりで、自由が無さ過ぎる

縛られたくないから、人類が発生してからも相当な間、個人（+式神s）で行動していたのだが

満足のいく出来の異界を造り上げるためとはいえ、魔術結社を組織してしまつたのが運の付き

側近達も仙術で寿命を延ばし、相当な経験を積んで有能なのだが盟主の決済が必要な事も少なくないわけで……執務室に数十年単位で縛り付けられるはめに

まあ、最近は『魔法界』の調整もかなり進み、移住させた魔獣たちも土地に馴染んで

交尾、繁殖などのバイオリズムも落ち着いている  
それぞれの縄張りも、上手いこと収まつたようだ

移してきた当初は、馴染みの無い土地に興奮し、荒れ狂い、誰彼構わず威嚇して

と、蜂の巣を突つついた様な騒ぎだったが…

そんな訳で、仕事も大分減ってきたので

長らく連れまわして育て上げた竜種の元少女

千歳（約400歳）に盟主代行を任せて抜け出してきたわけだ  
いやゝ、涙目で

「そ、ソウ様……そのようなことを為されては、こ、困ります……」

なんて言っている千歳は可愛かった……思わず襲いそうになって  
しまったくらい

どんどん寿命を延ばしている竜種は400歳で人間換算20代半ば、  
成竜に成り立てだが  
数百年掛けてみっちり扱いた分、下手な中年の竜よりも有能だ

「まあ、長くても100年は掛からないと思うから」

「そ、そんなあ……私まで文官の方達に叱られます」

「心配要らないよ？ マスターは、覚えていれば、約束はちゃんと  
守るから」

「時々ポカミスやらかしますが」

「イン、ヨウ……弁護するか、貶すか、どっちかにしなさい  
ま、ホントに久しぶりの旅なんだから、大目に見て」

「ううゝゝゝ……はあ、分かりました……無事のお帰りをお待  
ちしております」

「うん、行ってきます……皆によろしく言つていて

あと、技術班に、あの計画やつても良いけど

やるんだったら、私が帰るまでに形にしとくようにって伝えといて」

「はい、承りました。行つてらっしゃいませ、ソウ様、イン様、ヨウ様」

抜け出してしばらく経った後、本部の方から側近達の怒号が響いた気がした

たぶん、組織の全力で連れ戻しに掛かると思うので

幻術系では心許ない、と変化系の魔術で背格好、顔立ちまで変えて完全に別人に成り済ましてから、百数十年ぶりの地球へ渡った

途中、カエサルとの戦いぶりを見物したり、アジアの方へ寄り道したりしながら、ベツレヘムへ

実際にそこでイエスが誕生したかは分からないが、魔法が存在する世界

キリスト教関連で奇跡やら聖遺物やら出てきかねない

つまり、伝承の通りの出来事が起こる可能性は低くない

ベツレヘムへの旅路では、余計な警戒をされないように

年や体格を偽りローブを羽織り、旅の途中の易者を装って、商人の一行に潜り込んだ

どんな感じなんだろうかとワクワクしながら、ベツレヘムへ到着

身籠っているマリアらしい人物を魔眼でじっくり視てみると

なんというか、胎内で精霊を受肉させているっぽい感じ

厳密には自然界の火や風の精霊とは異なる存在みたいだけど

いったいどうやって……

空間にいつぱい居る精霊達に干渉して、おねがい実体に影響を持たせるだけ

でも大変なのに

それを、肉体を持つ存在にするなんて

いや、マリアが何かしたわけではなく、この精霊？　の方からマリアの中に入ったのか？

この精霊もどきについて、いろいろ調べてみる

どこかへ繋がっているらしいパス、受肉した身体に見合わぬ霊体インとヨウにも調査・解析を手伝ってもらった結果、わかったことはこの精霊もどき、余所の異界から堕ちて来た存在らしい

『完全なる世界』で造った人造異界ではなく、完全な天然モノの異界キリスト教的な考え方からすると、神様や天使が居る天界・天国みたいな感じ？

そこから堕ちてきて、生き延びるためにマリアの胎を借りて受肉した、というのが真相のようだ

でも、原作では悪魔はちよいちよい出てきてたけど、天使の類は出てなかったな

そんなことを思い出して、改めて、この精霊もどきと天界（仮）とのパスを調べてみたら

こちらの世界との繋がりが薄い？　門が開きにくい？　みたいで、干渉し難い世界みたい

ま、余計な連中がこっちに来ないに越したことは無い

心配事が減ったということ、のんびり物見遊山に戻りますか  
また成長した頃にでも見に来よう

弥生時代の日本を覗いて、米の一部をこっそり病に強い品種に取り替えてみたり

南米やインド辺りに行って、その土地独自に発展した呪術・魔術を学んだり

中国に行って、<sup>ナタ</sup>？？の所に顔を出したりした

？？には、魔法少女モードについて、ものすっつっつっつ………

……ごく、文句を言われた

封神演義の頃、その当時、世界トップクラスの難易度の戦場を  
どんなピンチでも使わないように、リミッターをはずさないように  
必死に、全力で、心の中で泣きながら？ 生き延びようと過ごして  
居たそうなの……

最終決戦でとうとう使ってしまった時は

敵味方両陣営からの生暖かい視線が集中して、居た堪れなかったと  
……いや、正直スマンかった

魔改造する機会が目の前にあって、ついカッとなってやってしまっ  
たんだ

反省している、でも後悔はしていない、そう言ったら思いっきり殴  
りかかられた……避けたけど

もうそろそろ、イエスが色々やらかして処刑されるんじゃないかなかつた  
っけ？

と思い出して、急いでエルサレムへ向かう

道中で、イエスの噂を聞いてみると

流石に死者蘇生はしなかったみたいだが、病気の治療に魔術的な要  
素のある行為を

‘奇跡’として大盤振る舞いしていたらしい

弟子達にも、分かる範囲でちょこちょこ継承させていたみたいだし  
そんなことすれば、神聖なる法術（笑）を独占したい神殿連中に睨  
まれるのは当然か

大抵、そういった俗物共は、権力の類と癒着してるもんだから  
権力に興味の無いお人好し達が、こうなるのは時間の問題だっただ  
ろう

半分精霊の、この世界のイエスが復活するかは分からないけど、何  
かしら起こりそうな予感がする

……いざという時のために、竜種達を何人か呼んでおくべきか？

いやあゝ、ゴルゴタの丘に来てみたが………なんという信者の群  
やっぱり、宗教は面倒だ

それで救われる人が居る以上、宗教自体を否定するつもりは無いけど  
狂信者が発生したら、つまらない理由でやれ異端だの、やれ蛮族だ  
の、やれ神の敵だのと言つて

あつさり虐殺、戦争の類が起こつてしまう………宗教に寛容？ だつ  
た日本人を見習え、と言いたい

いや、日本でも、ちつばけな理由でイジメや喧嘩が起きていたっけ？

それはおいといて…

兵士の数は十分みたいだから、まだ暴動は起きてないけど

これ以上信者が増えて、一部が暴走し始めたら

周りの大人しくしている信者も巻き込んで、絶対に止められないま  
ま大暴動になる

助けるべきか？ でも、秘匿すべき神秘を大判振る舞いした以上  
またいずれ、似たようなことが起きそうだし

善意の塊みたいな人だったら、止めたとしてもやめないだろうしな  
あ………

あれ？ なんでローマにも神殿にもイエス信者にも無関係な私が頭  
を悩ませているんだろう

ちつくしよー、何か起きたらキリストの十字架と神殿、ローマの宮  
殿に一発ずつ雷を落としてやる

目の前で落雷があれば、びっくりして動きが止まるだろうし

いや、逃げようとする民衆の大パニックに巻き込まれる可能性もあ  
るから、やめたほうが良いか？

そんなことを考えながら、うんうん唸っている間に

釘で両手を穿たれ、十字架に磔にされているイエスの生命が弱って  
いくのを感じる

召喚門でこっそり呼び出し、傍に控えさせている竜種の若者数人に暴動が起きた際の子供やお年寄りの救助を頼んでロープの下でインとヨウを纏い、準戦闘態勢に意識を切り替える

そして

処刑役の兵士が

イエスの死を確認するために  
わき腹に槍を突き立てた

その瞬間、空間が歪むのを感じた

イエスの死体を通じて、こちら側に何かが流れ込もうとしている例の天界が、イエスの存在を通じてこちらの世界の存在に気付いて彼の死体を触媒にゲートを開こうとしている？

何しに来る気だ？ イエスの死に対する抗議？ こちらへの侵略？  
上から目線で、こちらを救済するとか言い出すとか？ それとも、  
ただイエスの霊体を迎えに来るだけ？

何かが起こっているのに気づいたのか、処刑役は槍を手放し、そこから離れようとしている

刺さったままの槍を伝って、ゆっくりと滴る血が、ゴルゴタの丘に巨大な魔法陣を描き始める

正確には、血自体で描かれているのではなく、血から漏れ出る魔力？ に拠るもののため

一般民衆には見えていないだろうが、少しでも力の素質のある者は起こりつつある異常事態に気付き始め、ざわつき始めている

そして、門が開いた

まず顕れたのは輝く光の輪

そして、放たれる光で表情をはつきりと見て取ることは出来ないが、  
頭部

巨大な純白の光の翼で包まれた身体

翼の隙間からは、白い衣の裾がたなびく

全身を顕したところで

その三対六枚の翼を大きく広げた

何の力も持たぬ民衆は、自分よりも上位の存在に畏怖し、圧迫され  
抵抗力の低い幼子、老人から意識を失っていく

私の傍に居るということで、意識を奮い立たせ、気絶を免れている  
竜種達に

全力で民衆を避難、隔離結界を張るように指示

何しに来たかは知らないが、こちらで顕現されるだけで被害が大き  
すぎる

たとえ善意であつたとしても、こつちにとっては厄介事でしかない  
早々にお帰り願おう

「行くよ？ イン、ヨウ」

「イエス、マスター！」

ローブを脱ぎ捨て、背の双翼を羽ばたかせる

たぶん手加減できる相手じゃない

だから、久しぶりの全力全開！！

インの‘封印’で隔離結界を更に強化、‘吸収’で周囲の魔力を掻  
き集めれるだけ集め

ヨウの‘増幅’‘解放’で身体能力、魔力、気を、高めれるだけ高

める

とりあえず、門に押し込めるつもりでボディに拳を叩き込むが、呆気なく拳が相手の身体を通り抜けた

え？ 何今の……まさか、光って見えるのは、まんま光で構成されている身体だから？

じゃ、通常の物理攻撃は無効？

こちらの攻撃の意識を感じたのか、文字通り光速で降り注ぐ光の矢  
ちょ、マジで？ 矢が当たった所が高温のためか、融解して大穴に  
咄嗟に重力球を楯にして矢の直撃は避けたけど

殆どの攻撃が効かないのに、そっちは攻撃し放題かよ………なんとい  
う反則的能力

ということとは、重力系で光を削っていくぐらいしか、取れる手が無い  
炎や氷で光を屈折させようにも、エネルギー量が違いすぎて止めら  
れなさそうだし

「ああ、もうっ！ 厄介な……イン！ 重力全開！」

結界内に掛かる重力をヨウの‘増幅’も使って数百倍に  
自分も動きづらい、というか身体が重いけど

天使（仮）の光撃も速度が落ちるはず

無言で降って来る光の矢、槍を斥力の障壁、重力球の圏<sup>デコイ</sup>で逸らしつつ  
相手の身体を削るために距離を詰める

間合いを詰めての殴り合い、覚悟しやがれ！！

と、思っていたが

奴さん、なかなか器用な者で、近接戦闘においては

両手に構えた光剣、光楯に加えて、六枚の光翼でも攻撃してくる

手数が違いすぎるので、ヒットアンドアウェイを繰り返して  
少しずつ削っていくが、結界内の重力を操り

更に相手の身体を削るために力を振るっているインは  
相手の身体？ の1割も削れないうちに、かなり消耗してしまった  
門が完全でないのか、顕現が不完全なのか分からないが、  
出てきた所から動こうとしないけど

「このままじゃ、ジリ貧ね」

（も、申し訳、はあ、はあ…あ、ありません…）

「良いの、攻撃はヨウに切り替えましょう

イン、貴方は結界の重力操作に専念して、できれば余力を蓄えてお  
いて」

（（はい））

「 光精よ、我が手に集い、全てを貫く刃と為せ」

ヨウの構成する鎧の大部分を解除、それらを纏めて

身の丈を超える刃を持つ、巨大な両手剣に変化させる

片刃の刀身には、みっしりと‘増幅’の呪紋を追加していく

呪文を唱え、術式を構築、呼び掛けと魔力に精霊達が集い

式と呪紋に沿って、ヨウの刀身に重なるように光刃を形成していく

黒白の双翼に力を籠め、飛翔

肩に担ぐように構えた白の大剣を

相手の光剣・光翼を掻い潜りながら、一閃

振りぬいた勢いのまま、速度を殺さず姿勢を変え、更に加速して相  
手の背後へ

3メートルを越す光刃に‘破断’の力を籠め

厄介な光翼を、まず一枚叩き切る

そのまま勢いで突き抜けてしまい、距離が開いたところに濃密な光の弾幕を放ってくる天使（仮）

全身を振って方向転換、再度加速し、弾幕の散布界が広がりきる前に相手の懐に潜り込む

インによる荷重のおかげで辛うじて避けきるが、かすった攻撃による火傷が痛む

先ほど断ち切った翼に、光刃を槍のように突き立て、‘増幅’の呪紋を全力稼働

カシャーーーーン、と硝子の割れるような音と共に、砕け散る羽

「やっぱり、許容量以上の力を注ぎ込めば、ダメージは与えられるみたいね」

（ですが、消耗戦になりますよ）

「ここで止めとかなないと、折角造った『裏界』にも影響が出かねないわ」

（竜種の里も、今は『裏界』だっけ…それは、マズイよね）

「さて、こちらが力尽きるのが早いのか、そっちが弾けるのが早いのか・・・勝負！！」

斬って、撃たれて  
刺して、焼かれて  
砕いて、断たれて  
弾けさせて、貫かれて

光と光の応酬を重ねて、かなりの時間が経った  
重力を弄っている空間での光速戦闘に、時間の感覚がおかしくな  
てくる

相手の光翼は全てもぎ取り、胴体にも数撃、片腕にも喰らわせてや  
ったが

まさか、自分で肩口から腕を断って

全身へ広がるうとするダメージを減らすとは思わなかった

おかげでモロに攻撃を喰らって、焼かれた左半身は当分使い物にな  
らない

翼で移動は出来るが、全身を使った斬撃は無理

さて、どうしたもんか……と、インも大分回復したみたいだし、速  
攻で行った方がいいかな

「イン、行ける？」

（はい！）

「ヨウ、私の道を切り開いて」

（りょーかいっ！）

ヨウの鎧を全て解き

更に巨大になった大剣を突撃槍のように右腕に固定

そこに残った全力を籠める

面積の増した刀身に呪紋を追加

切っ先に‘破断’と斥力の楯の補助呪紋を

‘増幅’と光撃の呪紋は、更に密度を上げる

「行くよー!!」

‘破断’と斥力の楯で天使（仮）の弾幕の中  
私を通る、一直線の通り道を決じ開けていく  
相手も止めきれないと感じたのか、残った左腕に光剣を構え

閃光が交錯した

白の大剣は、天使（仮）の胸元に突き立てられ  
天使（仮）の光剣は………空を切っていた

互いに貫き合いそうになった時

ヨウが咄嗟に右腕と大剣の接合を切り離したのだ  
勢いに乗った大剣はそのまま突き立てられ  
相手の光剣は、切り離された反動で姿勢を崩した私には当たらなかった

刺さったままのヨウの刀身の呪紋が

天使（仮）の許容量を超えるエネルギーを生み出し  
その身体を崩壊させていく

罅割れ、砕け、その隙間から光を放ちながら、崩れゆく

顕現させていた、依るべき身体を失い  
その霊体が還るべき場所へ戻っていく

「イン、‘封印’を………ついでに、イエスの霊体も還してやって」

（はい………行きます！）

力を失っていく天使（仮）  
でも、まだやることが残っている

黒の籠手に覆われた右手を、門の中心に叩きつける

そこから、黒光が広がり、門の術式を‘侵蝕’していく

門の術式の中心に位置するイエスの遺体も取り込み

その機能を掌握、封印を開始する

（ 術式への侵蝕率9割を突破、門の機能を掌握、イエスの霊体の状態・・・休眠状態を確認

門の機能を一部反転、送還術式起動・・・3、2、1、送還終了、天

使（仮）の霊体の送還・・・3、2、1、終了

門の術式侵蝕完了、天界（仮）への接続を遮断、門の機能停止、ならびに術式の封印を実行……………）

血のように赤い門の術式・魔法陣が徐々に小さくなってゆく

（……………97、98、99、100%…封印完了です）

異界への門を構成する術式は、なかなかの難物だった

なんというか、術式に使われている言語が違う、とでも言うのか  
例えて言うなら、単語も文法も違うもの

それを掌握、封印するのは、ホント疲れた

「あー、もう、疲れたー……………何でこんな厄介事が起るかなあ…  
それも、目の前で」

「マスター、お疲れ様です……………傷は？」

「大丈夫、腕や脚を失うほどじゃないから  
それよりも、ヨウ、隔離結界を解放して……………みんな心配してるだろ  
うし」

「はい……開けーゴマ！」

そうして開いた結界の外は

……竜種と『完全なる世界』メンバーで一杯だった

「……………」

「……………」

一瞬の躊躇いもなく結界を再構成した

「…………マスター」

「うん、私は何も見なかった」

「マスター……………」

「逃げるよ、イン、ヨウ」

「マスター、それは……」

「……………どうかと思う」

「だって、まだ約束の100年経ってないもの」

「……………はあ……」

「いいから、さっさと行くよ」

「……………はい」

そうして、彼らは転移した

魔力の供給が途絶え、結界が解放された時には影も形も見えず  
外で包囲陣形を布いていた、『完全なる世界』の部隊長は

これから受けるであろう、側近＋文官達の愚痴と説教を想像し、ぐ  
つたりと頂垂れたそうなの

ちなみに、竜種の皆さんは、結界が開放されたときに無事な姿を見て  
「さすが、ソウ様だ」と、満足して帰って行ったそうです

## 6話：どーしてこうなったorz（後書き）

中々書くネタが思い浮かばず、3週間以上も掛かってしまいました  
今後も投稿間隔が崩れることがあると思いますが、  
見捨てないでもらえるとありがたいです

それでは、また次回

12 / 8 誤字及び一部表現を修正しました

7話：日常 騒がしくも楽しい日々（前書き）

お久しぶりです

7話を書き上げるのに、一月以上もかかってしまいました  
時間をかけた割りに、量も質も低下気味な感じですが……少しでも  
楽しんでもらえれば嬉しいです  
では、7話の始まりです

## 7話：日常 騒がしくも楽しい日々

7話：日常 騒がしくも楽しい日々

さて、イエス処刑騒動から数十年

あの後、無事に『完全なる世界』でキリストの遺体进行处理してくれ  
たらしい

民衆の記憶・認識処置も無事に終わり

「イエスの死と共に2人の天使が舞い降り、イエスを天に迎えた」

という感じに収まった

何故かもう一人の天使「私らしき描写が混じっているが……気にし  
ないことにする

それから、天使（仮） 三対六枚の翼から熾天と仮に名付けられ  
た

の破片は殆どが霊体と共に還ったが、一部はこの世界に残って拡散  
してしまっただけ

支部に顔を出した際にその話を聞いて、自分も残って後始末をすべ  
きだったかと少し反省した

邪神の時同様に、後処理を怠ったせいで、また厄介ごとを招いてし  
まったかもしれない

回収できた一部の熾天の破片は解析・実験にまわされて  
マッドサイエンティスト

どうにか能力再現ができないか、と研究班の良い玩具になっている  
そう

しばらくあちこちの古代の大国を流離って、伝統技能なんかを習得

していった

漢では陰陽五行説が生まれ、漢詩や釉薬を使用する陶磁器も発展してきた

陰陽五行説は、まだまだ生まれたばかりの理論だから、術式の穴や無駄な記述もあったが

リアルタイムで発展していく魔術理論を見ていくのは楽しかった  
自分でも改良、簡便化を行って、問題無さそうなのはこっそりと公開するなど貢献もした

あとは、魔眼を活用して、あっちこっちの陶工達から技術の良いところ取りをしたり

ナスカの地上絵が描かれている所を、ヨウの変化した大鳥に乗って上空から見学したり

また、集落に潜り込んでその土地特有の布の織り方や風習、神楽など様々な知識、理論、技術をイン、ヨウにも学ばせて、識ることによる成長を促した

同じ法則に至るにせよ、其処に到達するまでの過程や視点はその属する文明、思考体系によって異なる場合がある

その違いを学ばせることで、多面的なものの見方が出来るようになる……はず

あつという間に過ぎた百年

確認できる範囲では転生者も現れず

自分は最近魔法界に引っ込んで大人しくしている

大人しくしていないのは研究班リサーチ・サイエンティストの連中で

百年前に許可を出した「えっちなのはいけないと思います！」プロ

ジェクトでいろいろやらかしている

内容はご想像の通り、自動人形のメイドさん製作計画である

この時代では、未だにメイドという職業、衣装の類は出現していないので

お手伝いさん、家政婦の亜種と見なされているが

仕える主に忠実な、有能な女性というイメージのためか

『完全なる世界』の一部で、熱狂的な人気を誇るジャンルである

………何故か男性のみならず、女性にも人気があるが…百合か？  
百合なのか！？

製作に当たって、そのコンセプトを、戦闘系の能力重視の「戦うメイドさん」とするか

日常の家事手伝い系を主目的とする「ご奉仕系メイドさん（もちろんえっちな目的はありません）」とするか

無駄な議論で熱くなり、開発メンバーは大きく割れた

頭脳の開発にしても、天然どじっ娘を再現するためには、といった阿呆な理論を打ち立てる奴や

素直クール系メイドさんは絶対に再現すべしだの、メイドさんに必要なのは大人な包容力だのとほざく奴

みんなして好き勝手に研究するものだから

規格の合わない思考体系の人工知能もどきがいくつも生まれることに個性を出せるだけの感情や思考能力を備えたものに、いまだ辿り着いても居ないのに

気が早い連中ばかりである

ちなみに、ボディの方は某ライト…？　なノベルの侍女式自動人形を参考にして

ワイヤーシリンダーと鎖の関節、陶器とラバーの肌、油を血潮に造り上げた

流石に重力制御能力や人へと進化するボディはまだ無理だが  
簡単な命令プログラムに応えられるレベルのものはできたので

一部には単純なものだが、仕事をしてもらっている  
頭脳はともかく、身体は規格を統一できたので

最終的には、共通規格の様々なオプションを運用できるようになる  
はず

『魔法界』に馴染んだ獣人、亜人達の中で、有能な人材を採用して  
いるおかげで

万年人手不足は一応解消されてはいるが、裏切りなどの心配が無い  
戦力が増えるのはありがたい

特に事務系は給料は良くても使う暇なぞありやしない、と厳しい状態  
裏方で、華々しい活躍など期待できないために、皆入りたがらない  
のだ

それゆえ、このプロジェクト、他の部署があまり良い顔しなかった  
のに対して

仕事がつつい 人気低迷 人が入らない 仕事がつくなる  
の悪循環を突破できるのでは、と事務方で希望の星として全力で支  
援されている

「さて、今日も書類の山を片付けるとしましょうかね」

「ソウ様！ また研究棟が！！」

ドゴーーーーンと響き渡る轟音と、間をおかずに飛び込んでくる千歳

「またか！ あの馬鹿共が……予算半減してやろうつか」

研究棟があつたはずの方向から聞こえてくるのは、爆発や銃撃？等  
の戦闘音と

「退避急げ！」「警備部に連絡して、高位魔術師を誰か連れて来い！」「やめろー！俺の戦うメイドさん1968号がー！」「馬鹿野郎！！俺らの作品まで巻き添えにしゃがつて！」「急げ、研究棟の敷地の外に出すんじゃない！」「罪を憎んで作品を憎まずってことで、頼む！見逃してくれ！」「てめえのせいで俺らの予算まで減らされたら堪ったもんじゃないんだよ！」「余所にまで被害を出したら、盟主のお仕置きが恐ろしいことになるぞ！！」「崩壊した研究棟から使えるものは掘り出すんだ！」「いやだー！あの、心折られる様なお仕置きはいやだー！！」「しっかりしろ！帰って来い！現実を見るんだ！早く対処しないと、ホントに実現してしまうぞ！」「盟主さんのお仕置き……それもいいかもしれない……？」「正気に戻れ……！！！」

等の叫び声……

なんというか、阿鼻叫喚の地獄といった様子

それにしても、あのお仕置きはかなり効果があつたみたいだな……今後活用するでしょう

ま、予算減額は確定だけど……あの馬鹿共の場合、それでも何かやらかしそうだからなあ

「とりあえず、ストレス発散も兼ねて鎮圧しに行きますか」

そんなこんなで数世紀後

スクラップドブ　ンセスの半自律型魔法も参考にし、与える目標を単純にし

一度に対処できる事象に制限を付けることで、魔術式人工知能第一号が完成した

まだ術式が重く、一定の処理が終わるまで次の行動に移れないし、

感情面も未発達なため

現在は様々な人と触れ合わせるために、補助役を付けて事務の受付係をさせている

研究棟に置いておくと、情操教育に悪い変人とししか関われないし知らないのをいいことに、面白がって大嘘を学習させそうだからだ無垢な子が、邪悪な知識に染まっていくのを見過ごすわけには行かないのだ……女の子だしね

小柄なボディをシンプルなエプロンドレスに包み、たどたどしく受付をしている少女は

サクラと名づけられ、すぐに事務班のマスコットに

無表情気味だけど、仔犬みたいな雰囲気があって

仕事がない時などは、トコトコと近くに居た誰かの後ろをついてくるまだ思考も幼く、無垢で、眼にするもの全てが興味深いのか、他人がすることは何でも真似しようとする

男子職員の後をついていき、トイレにまで入っていこうとした時は大騒ぎになってしまったが

ちなみに、そのついてこられた職員は「俺は無実だー！！」等と叫びながら、女子職員に連行されていた

親鳥の後を付いて行く様な、真似する仕草の可愛らしさにやられてしまった職員は多く

コップを両手で抱えて一生懸命飲んでいる様子などは映像記録に撮られ、高額で取引されている

とある女子職員などは

「危つく「お持ち帰りーっ！！！」と叫んで自室に連れ込んでしまふところだった」

と息を荒げて呟いていたとか何とか

それに悪乗りする形で、研究班が無駄に技術を凝らした犬耳力チューシャが装備されることに

さすがに首輪は却下したが……犯罪者と紙一重なメンバーが多すぎる気が

大丈夫なのか？　ウチの組織は…

…いや、「Yesリータ！　Noタッチ！」とか言ってたから大丈夫、大丈夫なはずだ

「はあ……お茶が美味しいねえ……やっぱり平和が一番」

「そーですのう……ずずず」

今日は久しぶりの『裏界』側との連絡会で、竜種の長老である遥樹翁とのお茶会だ

遥樹翁は今年で大体二千百歳くらいになるはずの最高齢の竜種で、結構お茶目な爺さんだ

ま、私からすれば、まだまだ子、孫みたいなもんだけど

「マスター…爺臭い、いや、婆臭い？」

「うつさい、ところで前回提案した話だけど」

「ええ、人員の余裕も出来てきましたし、十分可能だと思われますわい……世界の記録、

出来るだけ第三者視点から行つ、可能な限り正確な歴史の編纂」

「私も自分が立ち寄った時代、土地の記録はとっていたけど、地球は、世界は広いから

個人で出来ることには限界がある……土地によっては文字や絵等の記録をとっていない所もあるし

戦争や侵略によって記録が失われてしまうこともある

どうせやるなら徹底的に……最近は平和すぎて、研究班と事務班以外はやることがだいぶ減ってしまっ

このままだと実働部隊や調査班の錬度も下がってしまいそうだからね」

「各地に拠点を設けて……干渉を避けるためにも、その存在は隠しておくべきでしょう」

「そうだね、下手に現地の権力者に目を付けられて私達が原因での戦や騒動が起きては本末転倒な訳だし」

「ついでに各地の魔術結社等にも幾人が潜り込ませるのはどうですかのう？」

色々と魔術や技術も盗めると思っのじゃが」

「おつ、それは面白そう……それじゃ、こんなのはどうか？……」

……」

「おお、それはそれは………」

………

…

大雑把ながら、計画の骨子ができたため、一息ついていると

「ソウさまー」「ソウさまだー」「あー、インさまとヨウさまも

いるー」

仔竜たちが遊びに来た

結構賢く、入ってはいけない空気とか敏感に察知して余所で遊んだりするけど

甘えるべき時にはとことん甘えてきてくれる可愛い仔達

たまに悪戯でトラップなどを仕掛けてくるけど、わざと引つかかってあげるのも楽しい

「ソウさまー、おはなししてー」「おはなし、おはなしー」「ソウさまー、こゆびでおつきないわをふきとばしたってホントー?」「まえの、じゃしんさんとのけんかはー?」「ばっか、いわじゃなくてやまだったろー」「やまをこなごなー?」「どーなったのー?」「ヨウさまインさまのだいぼーけんのつづきはー?」……

邪神や大冒険の話はともかく、流石に私でも、小指で山一つ吹き飛ばすのは無理……

いつの間にか話が大きくなっている……でも、子供達の期待を裏切るのは……

見ないでー、そんなキラキラした純真な眼で見ないでー……

結局、こっそりヨウの‘増幅’を用いて、小さめの丘を実演で吹き飛ばして見せてあげること

でも……また、話が大きくなっていくんだろうなあ……これからどうしよう

そんな感じの連絡会から始まった歴史編纂

数年に一度の報告会では、色々とその土地独自の道具、作物、料理等

実物を見せてくれたり、振舞ってくれたりするものだから、現場に出ず、本部に籠りきりになっている事務系のメンバーにとっても、良い息抜きになっている

出来事を書に記すだけでなく、資料として物品も収集している各国の書庫に潜り込んで文献の複写をとったり、貴重な芸術作品などもコピーを保存している

物を長期間、場所をとらずに保管できるという点で、魔術が便利すぎると改めて実感した

劣化を防ぐために、原作の魔法球のように時間の流れを弄って部屋の壁に呪紋を刻んで、保存するための空間を拡張する

修復関係も、魔術無しの場合より効率的……型月世界でなくて良かった

アツチの魔術だと、手間をかけて、科学でも再現できるものを行う？ だったはず

それ以上は魔法として、扱える者が限られてしまうそれに比べて、一応才能の有無はあれど

補助魔法具も存在し、大抵の術者が一定以上の効果を得られるネギま式は使いやすい

高性能な個よりも、中程度の性能の多の方が組織としてはありがたいのだ

「それにしても……ウチの魔術も大分節操無いなあ」

和洋折衷？ な呪紋、術式が刻まれた保管室を見回して呟く

「ケルトやルーン等の西洋魔術に、五行思想といった東洋魔術に仙術、南米・アフリカの呪術などなど」

「世界各地の技術を盗み、取り込んで昇華させているものね」

「ねー」

「ま、余所はまだ感覚的に扱われている感じだし、奥義として秘匿されたり、個人技能として扱われたり…

系統立てての分析・改良を組織的にやっているのはウチくらいのもんだよね

……… どうかに自慢しに行きたい、ウチのメンバーの優秀さとか、技術の効率の良さとか…」

ふと、子供みたいな自己顕示欲？な衝動に駆られて、どこ辺りならばらしても問題ないかな？  
などと、一瞬本気で思考するが、

「ちょっとちょっと、マスター、落ち着いて」

「そうですよ、それに自慢するとしても、変態と紙一重なメンバーをどう紹介するというんです？」

「そーいえば、そうだった」

頭の片隅に残る冷静な思考と、式神sの制止に

今ばらした場合のデメリットと、ウチの面子の濃さを思い出して、少々凹んだ

……… なんて、こんな変人ばかりあつまるのかなあ  
いや、実力は申し分ないんだけど……… もうちょっと、もうちょっとまともな人材が…

「たぶん、トップからして変人だから」

「上に習えって感じでじゃないかなー」

モノローグでの嘆きにまで突っ込まれ、撃沈された

7話：日常 騒がしくも楽しい日々（後書き）

少々短めですが、なんというかネタ切れ気味でして  
いつそ時間を飛ばしてしまうべきか、本気で悩み中です  
もうしばらく更新のペースが落ちた状態が続きそうですが  
気長にお待ちいただけるとありがたいです

**8話：鬼・悪魔・人でなし？（前書き）**

今回は早めに仕上げることができました  
それでは、8話の始まり始まり……

## 8話：鬼・悪魔・人でなし？

8話：鬼・悪魔・人でなし？

うーむ、西ローマが滅んだ後も、順調に発展を続けていた東ローマでは、文化事業も大分活発になってきたなあ…

これまでの歴史の流れから見て、記憶にあった世界の流れと大筋は変わらないみたいだから

たしか、もう数世紀後には『聖像破壊運動』があつたはず………複製の作成・收藏もペースを上げさせておかないと

北魏の雲崗石窟については……あんなでっかい作品、どーしようか………流石に原寸大は無理だね

以前に、似たような超大型作品つてあつたかなあ………現場では、大型作品の縮小スケールを統一すべきか

收藏の際に整理しやすいように、作品毎に変更すべきかで意見が分かれているのか……

スケールを統一した場合、今後更に大きい物が出てきた際の保管庫の………の………

………

「………さて、今回はここまで？」

歴史編纂プロジェクトの一環の美術品収集、その未決済の書類を片

づけて、大きく伸びをしながら千歳に尋ねる

あ、ボキボキ首の骨が鳴ってる……最近引きこもって書類仕事ばかりだったしなあ

「はい。今の所、特に急ぎのものはありませんので」

「うん、ありがと……イン達は？」

「現在、研究棟で実験の最終チェック中のはずです」

「そつか、なんとか間に合ったね……過去の魔術を解いて、より良い形に編みなおす  
そんな風に新しく構築した理論に基づいての初実験。見逃したら絶対後悔するものね」

執務室を出て研究棟の、耐魔・耐爆・耐汚染仕様の第四大型実験場へ向かう

現在、第四実験場では、新しい魔術理論の実証実験が行われようとしている

その床面にはびっしりと呪紋が刻まれ、精緻な魔法陣を形成している壁面にも細かく術式が刻まれ、不測の事態が起こった際

実験場内を外部と魔術的・物理的に隔離出来る仕組みである

魔法陣の各部には、既に幾人もの高位魔術師が整列し、呪文の詠唱を開始している

また、強化硝子で仕切られた隣の観測室では  
情報処理特化型の自動人形たちが、実験場内部の状態を事細かに記録している

足早に観測室に入るなり、イン達に尋ねる

「……状況は？」

「術者が配置につき、魔法陣に魔力を通し始めた所です」

「あと、約20秒で基礎呪紋の励起が完了して、第二段階に移行するよ！」

「星辰の配置も問題ありません」

「基礎呪紋の励起を確認、第一から第四までの隔離結界及び第一から第三までの拘束呪紋への魔力流入開始しました」

「探查呪紋の起動を認識…次いで、接続呪紋の励起準備を開始します……………」

高密度で刻まれた呪紋を順に魔力が流れ、その効果を次々に発動していく

同時に高位術者によって唱えられている補助呪文が、術式を加速させる

イン、ヨウ、自動人形達がその展開していく様を観測、報告を重ねていく

「対象の異界、通称『魔界』を認識……………接続開始」

「……………接続呪紋の完全起動を確認！」

「空間歪曲術式発動開始……………開門呪紋へ回路接続」

「<sup>ゲート</sup>門開きます……………4、3、2、1、開放」

魔法陣の中央の空間が歪み、暗い、冥い孔が姿を現す

「<sup>ゲート</sup>門と召喚術式の接続を確認」

「対象の固定化を実行」

魔法陣中央の呪紋が光を放ち、孔<sup>ゲート</sup>門を中心とした空間に立体魔法陣が展開する

その球形の光が大きく拡がり、そして……弾けた

中から現れたのは、影がカタチを成したかのような、冥い、黒い、<sup>あおくろ</sup>黝い、人ならざる存在

背には蝙蝠の様な翼、山羊の様な頭部、獣の下半身に蛇の尾、両腕は太く、鋭い鉤爪を備えている

「ワレヲヨビダシタノハ、キサマラカ」

強者としての威圧感を滲ませながら、静かに問いかけてくる悪魔に返されたのは

「よっしゃー！ 新理論の正しさが証明されたぜ！」「今夜は宴だ、ひゃっはー！！」「ボーナスゲットー！」

といった興奮した叫びと

「なんだ、ただの悪魔か」「ちつ、リアル悪魔っ娘じゃないのかよ……」「やはり、身体構造転換術式を仕込んでおくべきだったか」「はあ……期待してたのになあ」「次からは術式に色々仕込んで、対象選択に「美少女」属性入れようぜ」

などの冷たい？ 言葉……

予想だにしない反応に呆気にとられたのか、悪魔はポカーンと口を開けている

観測室の方では、実験の影響確認で忙しいために、完全スルーである

「言語変換もそこそ上手くいっているみたいね……周辺への影響は？」

「全隔離結界、及び全ての拘束呪紋は問題なく発動しており、確認できる範囲では影響は見られません」

「詠唱・呪紋起動を担当した各術者への魔力逆流・呪力汚染もありません」

「対象の母体世界との接続状況は？」

「…異界との接続維持を確認……接続呪紋も安定しています」

やっておくべきことを済ませ、観測室から実験室に移ると、悪魔がジロリとこちらを見た

適度に身体を弛緩させ、すぐに動けるように構えている  
思っていたより力量のある悪魔だったみたいね

「……キサマガココノアルジカ」

「ふう……お待ちしました。ここの代表やってます、ソウといいます」

「……ナニヲモトメテ、ワレヲヨビダシタ」

「新しいやり方で、きちんと召喚が行えるかの実験よ」

「アタラシイヤリカタダト……タシカニ……コノヨウナマハウジンハ、イママデミタコトガナイガ

アラタナシヨウカンジュツヲウミダシタツイウノカ……カノ、ソロモンオウイライノコトデハナイカ」

「あら、あの爺さまを知っているの？」

「フム、キサマノシリアイデモアツタカ……ヤハリ、ミタメドオリノネンレイデハナクゲブオアアツ！」

「女性に対して年齢のことを指摘してはいけません……ま、私は普通の女じゃないからこの程度で済ませてあげるけど」

「ゲハツ、ガツ、ハアハアハア……ナントイウキョウボウナオン  
nグボアアツ……」

ちよくちよくと要らんことを口走る悪魔に、ボディブローを立て続けに叩き込む

まったく、失礼な悪魔だと思わない？ と同意を求めて周囲を見回すと、みんなして顔を逸らした

インとヨウなどは腹を抱えて爆笑している……私の味方は誰も居ないのか、と少し凹んだ

気を取り直して、会話を再開する

「まあ、新しい理論と言っても、過去の術式を比較・分析して、最低限必要な構成要素を抜き出し

それを元に、より効率が良くなるような術式の並べ方、その法則を調べ上げただけ

目新しい技術としては、依巫などの霊媒に憑かせるのでもなく、生

贅の血を元に実体化させるのもない

こちらの世界での行動を可能にする肉体を、魔力を用いて編んだくらしいものね

過去のと比べると、魔力のロスが減った分を現界のために用いているから、負担はあまり変わらないけど

生贄や霊媒を準備しなくて済む分、手間は大幅減ったわね」

「ホウ…コノカラダハ、キサマヲマリヨクデキテイルノカ……イワカンヲカンジンナ」

「それは良かった。ま、強力な攻撃魔法を受けたり、無茶な運用をすると崩れちゃうけど

体が解けると送還術式が発動するようになっていいるから、滅ぶ心配はないと思うよ……たぶん」

「……………タブン？」

「だってこれ、初めて使用する術式だから」

「……………」

「というわけで、一回でかいの喰らって還ってみてくれない？」

と笑顔でお願いすると、悪魔の奴は失礼なことに

「ソ、ソノヨウナオソロシイコトヲシヨウトスルトハ……サテハキサマ！ ニンゲンデハナイダロウ！！？」

「失礼な。それに技術の発展には、犠牲は付き物なのよ？

上手く送還術式が起動しなかったら、きちんとこちらで発動させて

あげるから……計算上では間に合うはずだし」

「オニ！ アクマ！！ ヒトデナシ！！！」

「悪魔は貴方じゃないの……」

必死に逃げようとするが、こんなこともあるのかと、魔法陣に組み込まれていた四重の隔離結界で逃げ場を塞がれ  
三本の拘束呪紋にギツチリと縛り上げられる

助けを求めて必死に周囲を見回すが、そもそもここに居るのは  
魔術や科学に魂を売り払った研究者だけである  
皆イイ笑顔で手を振っている

「ヒイツ！！タ、タスケて……」

周囲の実験機材への影響を考慮して、小さく絞り込まれた重力球が  
魔法陣の中心に発生

指先ほどの大きさの黒い点が、一気に悪魔の身体を飲み込んでいく

キュゴッ

と空気を吸い込むような音とともに、悪魔の仮初めの身体は消滅した

「観測班！ 悪魔の消滅時のデータは？ 送還術式の発動は？」

「……発動までに多少タイムラグがあったようですが、無事に発動したことを確認しました」

「タイムラグ？ それで何か問題でもあった？」

「少々痛く苦しい時間が長引いたくらいかと」

「ふーん……それくらいならまあ、いつか」

残念ながらこの場に

重力魔法で潰される痛みや苦しみが長引くのが、そのくらいで済む訳ないだろう！

などといった、被害者側から見た常識的な意見を述べてくれるものは居なかった

「さて、片付け開始！今夜は宴よ！事務の方に実験の成功を報告して、厨房にもね

材料の制限は無し、って伝えておくように……あと、酒蔵も開けていいわ。秘蔵の奴を引っ張り出さない！」

「うおおおー！！！！！」

「あ、余裕がある奴は、さっきの彼を再召喚してあげて……せつかくだから、宴に混ぜてあげましょう」

その夜、『魔法界』の一角、『完全なる世界』の本部から明かりが消えることは無かった

薄暗い一室

その部屋に在るのは4つの人影

3つの姿はヒトのものだが、最後の1つはどこか歪な印象を見るものに与えている  
手も足も一對ずつあり、頭、首、胴と連なっている身体もヒトのものと変わらない

だというのに、まるで人では無いモノを無理矢理人型に押し込めたかのような、歪<sup>ゆが</sup>み、歪<sup>ひず</sup>みを感じさせる

そんな奇妙な人影が、聞く者を恐怖に陥れるような、奇怪な声を発した

「%&amp;mp;( + >、 + : # ( ① @ ¥ / - 〃 ^ ) > ; \* 、 + < — 〃 ) %&amp;mp; ; + …… h I、ひさ、sh i ぶり% …… だな …… \* そう、y O \$ #」

かろうじて、人の言葉に似た発音が混じっているが、人ならざるものの割合の方が多い  
そんな相手の発声に、呆れたようにソウは言葉を返した

「もうちょっと滑らかに喋れない？ あまり、そちらの言語が表に出ると、発狂する者が出かねないの」

ソウに続くように、イン、ヨウも言葉を重ねる

「出来れば…姿の方も、もう少し歪みを減らしてもらえるとありがたいです」

「ヒトとの差異はそんなに大きくないんだけど……残っている微妙な歪みのせいで  
妙に情緒不安定な気分させられるから」

「私達は慣れています…というより、対応できてますけど、その状

態で人前に出られると……」

「…S A N 値直葬される住民続出で、そのまま一つの街が滅びかねないかと」

「（\*∴、< M u ず力しい…+ @ c o t をIう…」

「…仕方が無い。出来るようになるまで、しばらく本部に籠ってもらおう」

……イン、対S A N 値直葬眼鏡の配布状況は？」

「本部職員の93%に配布済みです」

「残りは現在本部外へ出張中だから、帰還時に渡す予定になってるよー」

「支部や隠れ家のメンバーにも現在の状況は通達済みですので本部施設内に無断で直接転移してくることは無いでしょう」

「それは良かった」

みっちりと現在の地球のおおまかな一般常識、言語を教え込み人型への擬態、発声のトレーニングを繰り返し続けた

その間、一部の通常業務が滞り、多少の損益も出てしまったが邪神をそのまま連れ出した場合の被害を考えると遥かにマシだ以前に約束してしまったのだから、面倒は最後まで見ないと……

最終的に、外へ連れ出せるレベルに到達したのは、半年も後になってのことだった

そして、邪神という存在である以上、何事も無く予定通りの日程で進む訳も無く

ホントに……ホントに色々な出来事があつた

例えば、こんなことが……

「待てーっ!!」

唐突に掛けられる大きな声

「邪神どもめ……この俺が居る限り、地球に手は出させるものかつ  
!!」

高い寺院の屋根の上に人影が一つ……ここからだ、逆光でシルエ  
ットしか見ることが出来ない  
その人物が

「とうっ!!」

と屋根から飛び降りた

落下している間に、何かを早口で唱えているようだ

そして

天に光の円陣が浮かび上がった

其処から零れ落ちるように、巨大な影が姿を現す

素は神の紛い物、魔道の知識を持って、外道を駆逐する、機械仕掛  
けの神……

この世界にあり得る筈の無い、強大な力  
鬼械神である

外見はデモ ベインとリベル ギスを掛け合わせたような形状で  
背には巨大な翼、脚部には大きな装甲、鋭い鉤爪を備えた手、輝く  
鬘を振り乱す頭部を備えている

おそらく、邪神Ⅱ悪という彼の考え方そのままに  
こちらに向けて、その強大な力を振るおうとし

『完世観光 邪神さん一行、ご案内中』 『聖地巡礼ツアー中』

等といったプラカードや引率旗に気付いたらしく、固まった

「……あの、そんな巨体で傍に立たれると、影になって記念撮影  
の邪魔になるんですけど」

「……………」

「あの〜」

「……………あ はい……………すみません……………」

興奮してしまつて、擬態が解けかけたり、周囲への汚染・侵蝕が発  
生したり……………

そんな邪神達の、周辺に悪影響しかもたらさない問題行動を抑える  
のに専念し

記念撮影の準備を済ませ……………気付いた時には彼の姿は無かった

「さっきの……………いったい何だっ たんだろうな？」

「さあ？」

「あとで、宿で待機してる盟主に報告だけしとくか」

「そだな……それに、余計なことに気を向けていられるお客さんじゃないんだし」

「おう………撮影機の準備は？」

「完了したよ」

「わかったわ……え……、それでは皆様、写真撮りますよ……？  
— 足す一は……？」

「……に……い……い……」

後でこの報告を聞いた時は、あまりの内容にテーブルに突っ伏してしまっただが……

ちなみに、私達が宿で何をしていたかというと、

インとヨウは、擬態が多少崩れてしまった場合等に騒ぎにならないよう、邪神をまともに捉えないように認識阻害の結果を

私は、何か大きな邪神災害が発生してしまった場合、被害をこの街だけに止めるための隔離結果を

それぞれ構築するのに専念していた

なぜ、直接邪神の傍に付かずに、こんな回りくどい方法を取っているかというと

邪神たちも多少は丸くなり？ また、能力に制限を加えるための強力な封印呪紋を編み込んだ布を纏ってもらい

上級メンバーであれば、人数さえ揃えばある程度まで宥めれるようになったのに加え、

直接私が抑えに行つたとしても、まともに邪神を相手取れば、この地方一帯が壊滅するのは免れ得ないからだ  
それなら、確実に被害が出てしまつとしても、街一つに抑え込んだ方が遥かにマシだ

そんな嫌な意味でハラハラドキドキな邪神達の観光旅行は、幸いにも大きな被害を出すことなく終わりを迎えた  
チヨコチヨコとした被害は結構あつたけど

……本部滞在中の邪神関係の事故、事件による本部の修理費とか、職員の治療費とか、旅行の間の本部待機組の胃壁とか頭髮とか、旅行先の料理に感激した邪神の一人によつて、宿が一軒崩壊したこととか……あの時は、宿の女将への認識操作や建物の修復、周辺住民の記憶の齟齬が無い様に仕上げるのに、どれだけ苦労したか……

アレだけいろいろやつたんだから、しばらくはこちらには来るのを控えてくれるだろう

興味を持ったことを向こうでも試してみる、とか言つてたしね

ま、終わり良ければ全て良し、だね

そんなことを考えながら、机の上に放り出された写真の一枚を拾い上げる

‘につこり’というより、むしろ‘ニタア’、‘グバツ’といった感じの空恐ろしい笑顔の、しかし楽しそうな邪神たちが写っている  
ま、代金もちゃんと言つたし、これだけ楽しんでくれれば、計画を立てた側としても文句は無い

こんな綱渡りな旅は、もう二度とやりたくないけど

旅行中に現れた転生者らしき人物とか、懸念事項はまだ残っているけど

とりあえず……みんな、お疲れ様

## 8話：鬼・悪魔・人でなし？（後書き）

自分で書いていて、あれ……こんな流れにする予定だったわけ？  
と首をかしげるくらい変なものを出してしまった気がします  
あと、ネタが尽きると毎回、邪神さんの登場で凌いでいる気が……  
もっと精進します……未熟な作者をお許しください

とりあえず、時間をすっ飛ばすのは先送りにして、もう少し粘ってみようかと思っています

なので、原作の時代に入るまで、こういった短編集に近い感じの話が続くことになると思います

それから、今回の召喚魔法など、この作品で扱われる魔術の演出は独自のものです

実際には間違ったやり方である可能性があります。ご了承ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5899n/>

---

不老不死の活用方法？

2011年9月1日13時30分発行